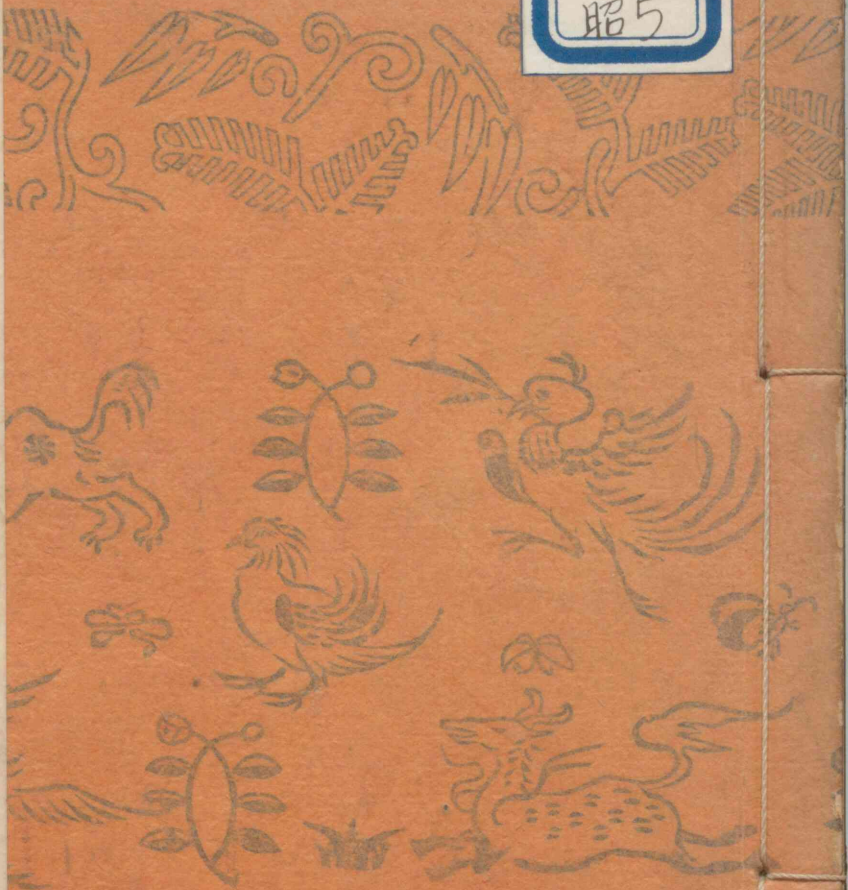


中等國語讀本

新修二版

卷十

4a
810
昭5



42544

教科書文庫

4
810
44-1930
20000 90670

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

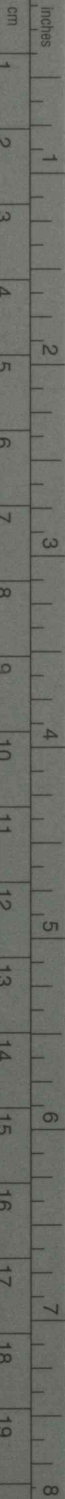


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省檢定

昭和八年七月五日
實用國語科

昭和五年十月九日
中學國語科

中等國語讀本



編者

金落
子合
元直
臣文

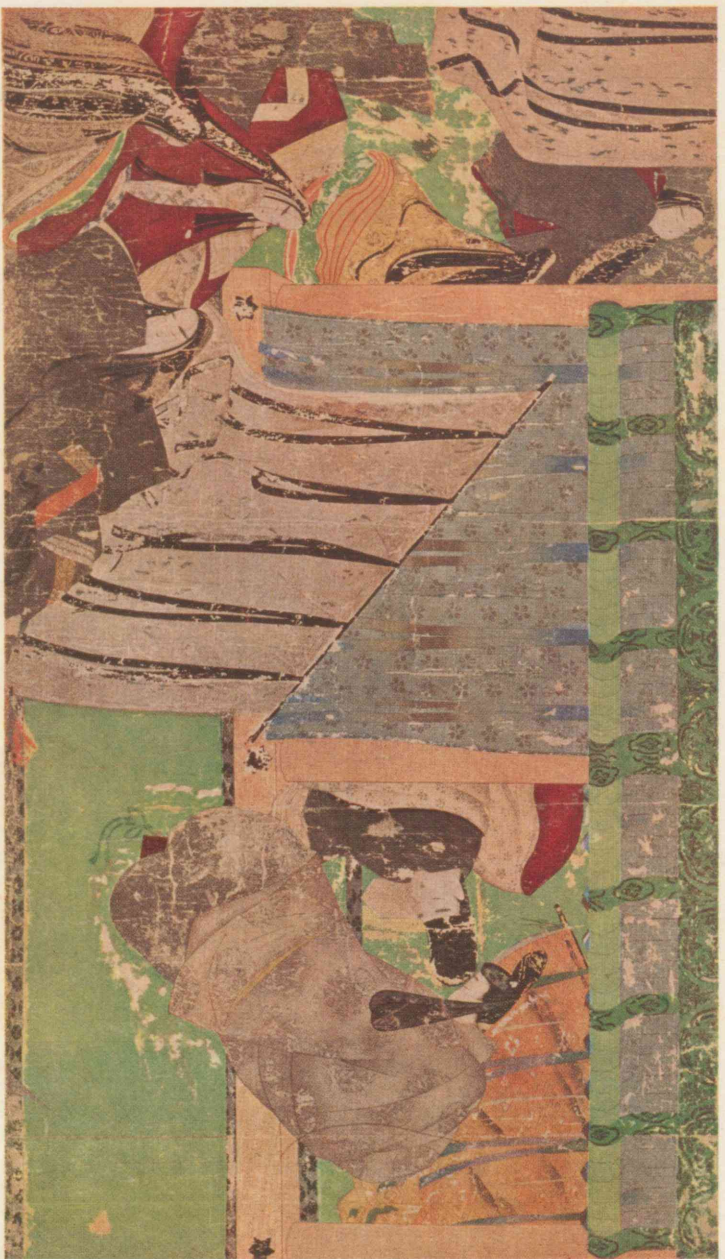
TYAMAZAKI
新修二版

資料室

4a
810
485

3
4
6
7
9

84 77 72 66 65 61 34 52 51 36
116 113 112 110 108 105 98 94



性 民 國 本 日 と 術 美 六

(筆 能 隆 原 藤, 傳) 卷 繪 語 物 氏 源

卷十目次

一 御即位禮勅語……………(官報)……………一

二 大禮壽詞……………田中義一……………三

三 芭蕉の臨終……………相馬御風……………七

四 いせの物がたり……………(伊勢物語)……………一五

一、東下り……………一五

二、小野の御室……………一八

三、さらぬ別……………二〇

五 古文學に現はれた大和民族の根本性…五十嵐力……………三

六 美術と日本國民性 その一……………藤懸靜也……………三

七 同	その二	田邊尙雄	三六
八 歌謠に就いて		田邊尙雄	三六
九 うたひ物			四七
一、神樂歌		(神樂歌)	四七
二、催馬樂		(催馬樂)	四七
三、朗詠		(和漢朗詠集)	四九
② 一〇 法成寺		(榮華物語)	五三
一一 國家と社會的意識		西田幾多郎	五七
一二 詩聖杜甫		徳富蘇峯	六四
一三 朝鮮の美術		柳宗悦	七
① 一四 平安人の趣味		金子元臣	七

④ 一五 物のあはれ		本間久雄	八
⑤ 一六 清文私評		金子元臣	九
一、春は曙			九
二、過ぎにし方戀しきもの			九
三、あてなるもの			一〇
四、香爐峯の雪			一〇
一七 斷光録		綱島梁川	一〇
一、苦痛の祕義			一〇
二、自大自矜の一念を慎めよ			一〇
三、自然			一〇
⑥ 一八 萬葉集概観		金子元臣	一〇

① 一九 御民われ (和歌) …………… (萬葉集) …… 二六

② 二〇 神武天皇の御東征 …………… (古事記) …… 二二

③ 二一 文學藝術の三作用 …………… 坪内逍遙 …… 二〇

二二 生活の基礎 …………… 木村泰賢 …… 二六

(終)

〔附錄〕奈良時代風俗圖

國文學史(現代)

現代文學一覽

日本畫家一覽

中等國語讀本 新修二版 卷十

一 御即位禮勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗惟神ノ大道ニ遵ヒ天業ヲ經綸シ萬世
 不易ノ丕基ヲ肇メ一系無窮ノ永祚ヲ傳ヘ以テ朕カ躬ニ逮ヘ
 リ朕祖宗ノ威靈ニ賴リ敬ミテ大統ヲ承ケ恭シク神器ヲ奉シ
 茲ニ即位ノ禮ヲ行ヒ昭ニ爾有衆ニ誥ク
 皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコ
 ト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率キテ敬
 忠ノ俗上ニ奉シ上下感孚シ君民體ヲ一ニス是レ我カ國體ノ
 精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存スヘキ所ナリ

皇祖考古今ニ鑒ミテ維新ノ鴻圖ヲ闢キ中外ニ徵シテ立憲ノ
 遠猷ヲ敷キ文ヲ經トシ武ヲ緯トシ以テ曠世ノ大業ヲ建ツ皇
 考先朝ノ宏謨ヲ紹繼シ中興ノ丕績ヲ恢弘シ以テ皇風ヲ宇内
 ニ宣フ朕寡薄ヲ以テ忝ク遺緒ヲ嗣キ祖宗ノ擁護ト億兆ノ翼
 戴トニ頼リ以テ天職ヲ治メ墜スコト無ク愆ツコト無カラム
 コトヲ庶幾フ

朕内ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ益國運ノ隆
 昌ヲ進メムコトヲ念ヒ外ハ則チ國交ヲ親善ニシ永ク世界ノ
 平和ヲ保チ普ク人類ノ福祉ヲ益サムコトヲ冀フ爾有衆其レ
 心ヲ協ヘ力ヲ戮セ私ヲ忘レ公ニ奉シ以テ朕カ志ヲ弼成シ朕
 ヲシテ祖宗作述ノ遺烈ヲ揚ケ以テ祖宗神靈ノ降鑒ニ對フル
 コトヲ得シメヨ (官報)

二 大禮壽詞

臣義一謹ミテ言ス伏シテ惟ミルニ

陛下

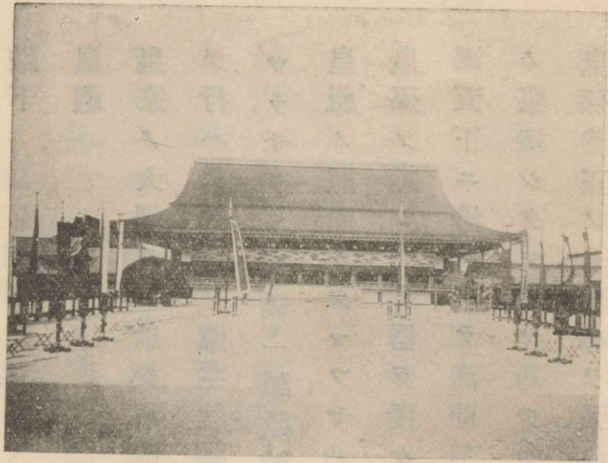
皇祖

皇宗ノ大訓ヲ奉承シ萬世一系ノ大統ヲ紹繼シ茲ニ即位ノ禮
 ヲ行ハセタマフ億兆欣躍孰カ四海同慶ノ大典ヲ賀シタマ
 ツラサラン臣義一誠歡誠喜頓首頓首恭シク惟ミルニ

皇祖ノ照臨シタマフヤ乃チ
 皇孫ヲ降シ 神器ヲ授ケ天壤無窮ノ 神勅ヲ賜ヒ惠民ノ德
 澤天下ニ洽ク以テ萬世不易ノ 皇基ヲ定メタマヘリ 皇宗
 ノ肇造シタマフヤ乃チ中州ヲ平カニシ 帝位ニ即キ
 皇孫養正ノ 聖心ヲ弘メ建國ノ經綸後世ニ被ラシ以テ一統
 無疆ノ 皇業ヲ成シタマヘリ爾リシ自リ以來

列聖相承ケ上深仁ヲ施シテ愛撫下ニ厚クシ下至誠ヲ奉ケテ

感戴上ニ親ム蓋シ國ヲ以テ家ト
爲シ君民ノ一體タル君ヲ視ルコ
ト父ノ如ク忠孝ノ二途ナラサル
是レ我カ國體ノ神聖ニシテ萬邦
無比ナル所以ナリ



儀の殿宸紫

聖詔ヲ頒チ立憲政體ノ永制ヲ敷キ治具皆張リ文物悉ク備ハ
ル進ミテ用兵ノ名ヲ正シ 皇風ヲ千里ニ宣ヘ退キテ厚生ノ

明治天皇聖德深厚ニシテ神謨宏
遠中外ヲ經緯シテ維新ノ隆運ヲ
啓キ古今ヲ斟酌シテ中興ノ大業
ヲ成シタマヘリ乃チ 宸勅ヲ降
シ國民道德ノ大本ヲ建テ乃チ

道ヲ盡シ國祚ヲ萬世ニ固クシタマヘリ

大正天皇天資聰明ニシテ聖性仁孝 先朝ノ丕績ヲ紹述シ

繼體ノ宏謨ヲ恢弘シ奎運其レ昌ニ 稜威維レ揚リ 皇德ヲ

宇内ニ光被シタマヘリ

陛下乃チ聖ニ乃チ明ニ德ヲ 儲位ニ養ヒ允ニ文ニ允ニ武ニ

政ヲ 宸宮ニ攝シタマフ既ニ 宸極ニ御シ遠ク肇國ノ 天

業ニ鑒ミ寬仁化ヲ敷キ乃チ乾綱ヲ攬リ博ク 列朝ノ 聖訓

ニ徵シ宵旰治ヲ圖リタマフ億兆咸至隆ノ治化ニ沐シ遐邇悉

ク丕顯ノ恩德ニ浴セサルモノナシ今ヤ辱ク 聖勅ヲ賜ヒ普

ク臣民ニ誥ケサセラレ

皇祖ノ肇基

皇宗ノ創業以テ

列聖繼述ノ迹ニ逮ヒ我カ國體ノ淵源ヲ闡發シ以テ國家統治

ノ大綱ヲ明ニシ以テ臣民遵由ノ大道ヲ示シ汎ク國際ノ親和ヲ冀ヒ深ク人類ノ慶福ヲ望マセタマフ 聖慮深遠臣等感激何ソ已マン臣等豈ニ夙夜淬勵 聖旨ヲ奉體シ誓ヒテ奉公ノ節ヲ致シ以テ 聖恩ノ萬一ニ報イタテマツラサランヤ臣等幸ニ盛儀ニ陪シ 天日嗣高御座ヲ拜瞻シタテマツリ愉悅并舞ノ至ニ勝フルナシ臣義一帝國臣民ニ代リ仰キテ登極ノ大禮ヲ祝シタテマツリ敬ミテ 寶祚ノ無窮ヲ頌シ恭シク 聖壽ノ無疆ヲ禱リタテマツル臣義一誠歡誠喜頓首頓首謹ミテ言ス

昭和三年十一月十日

内閣總理大臣從二位勳一等功三級男爵臣田中義一

三 芭蕉の臨終

芭蕉の死病は随分猛烈な痢病であつたらしい。彼は多くの忠實な情の深い弟子達の心をこめた介抱を受けつつ、この世を去つた。しかもその烈しい病苦に對して、苦しめども亂れず、悩めども狂はぬ、靜なる魂の把持者の莊嚴相は、誠にただ崇敬の外はない。

病床に就いてから八日目の朝、芭蕉は去來を枕邊近く呼んで、

「先の頃野明が方に残し置き侍りし大堰川に吟行せし句

おほむ川波に塵なし夏の月。

この句あまり景色過ぎたれど、大堰川の夏景色いひかなへたりと思ひ居たりしが、清瀧にて、

清瀧や波に散りこむ青松葉。

と作りて、事柄こそ變れ同案なりと人のいはんも如何なれば、

去來

蕉門十哲の一。
向井氏。名は兼時、通稱平次郎。落柿舎と號す。肥前の人。京都に住す。寶永元年九月歿す。(二三一年—二三六四年)
野明
芭蕉の門人。
清瀧
京都府葛野郡。

園女

伊勢松坂の人。岡四惟仲の妻。芭蕉の門人。尼となり智鏡と號す。享保十一年四月歿す。(二三三一年—二三三八年)

「大堰川の句は捨て侍らん」と汝に申したりき。然るに、頃日園女に招かれて、
白菊の目に立てて見る塵もなし。
と吟じたりき。これ亦同案に似て句の道筋おなじ。それ故前の二句を捨てて、白菊の句を残り置き侍らんと思ふなり。汝が意如何。

こんなことを靜に語つたといふことを、花屋日記の中に、去來自ら書き記してゐる。そして去來は更にかう書き加へてゐる。

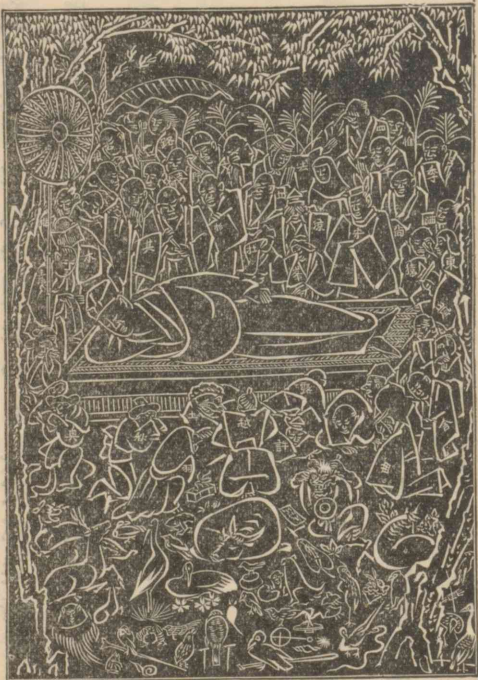
「去來涙を浮べ、名匠のかく名を惜しみ道を重んじ給ふありがたさよ。わづか句一章にさまで千辛萬苦し給ふ御病惱の中の御骨折、風雅の深情こそ尊けれ。」

かやうに感歎した後で、去來は懇にその三句のいづれも同案とは見えぬ旨を述べて、師を慰め參らせたこと自ら書いてゐる。一日に二

十度、三十度の多きに達したと記されてゐる烈しい下痢を、數日に亘つて苦しみ續けてゐながらも、一念わが藝術の一途に集まる時、かくも靜な、かくも明かな、かくも嚴肅な心境が廓然として展開されるのであつた。こ

に至つては、私達はもう讚歎の言葉をも知らないのである。

日一日と容態が悪くなつた死前五日の事、やはり去來は支考、乙州等の勸により、師



芭蕉看護の圖(畫齋)

の枕邊に寄り添うていつた。

「古來鴻名の宗師多くは大期に辭世あり。さばかりの名匠辭世

支考

蕉門十哲の一。美濃の人。各務氏。美濃派の祖。享保十六年二月歿す。(二三二七年—二三三九年) 乙州 近江大津の人。芭蕉の門人。

はなかりしかと世世いふ者あるべし。あはれ一句を残し給はば諸門人の望足りぬべし。

衰へ果てた息の限をつくし、次郎兵衛といふ僕が傍から口をうるほすのに辛うじて力を得て芭蕉は語りつづけた。

「昨日の發句は今日の辭世、今日の發句はあすの辭世、我が生涯いひ捨てし句句、一句として辭世ならざるなし。若し我が辭世はいかにと問ふ人あらば、この年頃いひ捨て置きし句、何れなりとも辭世なりと申し給はれかし。諸法從本來常自寂滅相。これはこれ釋尊の辭世にして、一代の佛教この二句より外はなし。古池や蛙とび込む水の音。この句に我が一風を興ししより初めて辭世なり。その後百千の句を吐くにこの意ならざるはなし。ここを以て句句辭世ならざるはなしと申し侍るなり。この事を記した支考は、この語實に立立微妙、翁の凡人ならざる

諸法從本來云
法華經方便品の句。

モットー
Motto
標語。

を知るべし」といふやうな氣のぬけた言葉で讚美してゐるに過ぎないが、芭蕉のこの言葉ほど適切に藝術にとりて千古のモットーたるべき言葉を、他に何人が残し得たらうと思はずには居られない。

「我が生涯いひ捨てし句句、一句として辭世ならざるはなし。

何人も正にこの一語の前に襟を正すべきである。旅に病みて夢は枯野をかけ廻る。

といふ彼の最後の句を弟子達に示した時にも、これは辭世にあらず、辭世にあらざるにもあらず、病中の心なり。然しかかる生死の一大事を前に置きながら、いかに生涯好みし風流とはいひながら、これも妄執の一つともいふべけん。今は本意なしとの歎聲を自ら禁じ得なかつた。

一方に自ら親とも慕ふ弟子達の温かな情愛に、涙を流して感謝

し、喜悅しないでは居られなかつた芭蕉は、これと同時に、他方に於いて夢魂ひたすらに曠漠たる枯野を驅け廻る孤獨悲痛な旅人であつた。そこに芭蕉の矛盾があり、そこに芭蕉の調和があつた。

花屋日記十月十一日、即ち芭蕉終焉の前日の條に、病める師のたべ残しの粥を、去來がおし戴いて食べたことが書いてある。又その前夜惟然と正秀とが二人で一つの蒲團に寝て、お互に彼方へ引き此方へ引きして、二人とも終夜寝入らずに明かし、しらじらと東の空の白むのに氣付いて、二人顔を見合はせて笑ひ合つたといふことが書いてある。そしてその事をそのまま句に詠んで皆に示すと、一座どつと笑ひ、病中の師も流石に笑を洩らし給うたといふ事も書いてある。更にその日は暖かな晴天であつたので、日向に蠅が澤山集まつて來た。それを看病の人達が眞劍に藪にさして取り合つた。それを又病人が、暫時の後に疲れて苦しむのも忘れて興じてあ

惟然

芭蕉の門人。美濃の人。廣瀬氏。寶永七年五月歿す。(一三三七〇年)

正秀

芭蕉の門人。

句に詠んで

惟然、「ひつぱりて蒲團に寒き笑かな」正秀、「思ひよる夜伽もしたし冬ごもり」。

木節

近江大津の人。

醫を業とす。芭蕉門下。

文章

蕉門十哲の一。

尾張犬山侯の重臣。内藤氏、通稱林右衛門。元祿十七年歿す。

(一三二〇年—一三六四年)

其角

蕉門十哲の一。

近江堅田の人。江戸に住す。江戸座の祖。寶永四年二月歿す。

(一三二一年—一三六七年)

た、かういふ事も書いてある。それから又師のかうした機嫌好きに乗じて、支考が日頃考へてゐた師の句集編纂の事を師に諮らうとして、師の心をよく知つてゐた去來に叱られ、叱られて次の間に立つ寒さかなの一句を残して退いたことが書いてある。それを又病人が洩れ聞いて、氣を悪くしなかつたばかりか、むしろ可笑がつたといふ事も書いてある。何れも涙ぐまずに居られぬ光景である。

鬮とりて菜飯たかする夜伽哉。

木 節

皆子なりみの蟲寒く鳴きつくす

乙 州

うづくまる薬のものと寒さかな。

丈 草

吹井より鶴をまねかむ初しぐれ。

其 角

かく示された弟子達の作句の中から、芭蕉は特に文章のを一句とり立てて、

「文章出かされたり、いつ聞いてもさびしをり調ひたり、面白し、

相馬御風
文學者。名は昌治。新潟縣の人。明治十六年七月生まる。

と皺がれた聲で褒めたといふことも書いてある。それを批判した芭蕉の心はいかにも澄徹して居る。しかもそれは彼の臨終を幾時間も隔ててゐない時のことであつた。(相馬御風—砂上漫筆)

面白し。

芭蕉は聽覺型の人であつた。彼の早い頃の作で初めて光を見せた「芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな」の句が、まづ聽覺感である。彼が一代の傑作に擬しても恥しくない。静かさや岩にしみ入る蟬の聲に至つては、作者が全く聽覺型の人であつたといふ證據になる。蟬の聲を聞いて「岩にしみ入る」とまで深く感ずることは、勿論作者の心全體が深い自然の神祕に醗つてゐたからには相違ないが、一面からいへば特に聽覺にすぐれた傾能を有する人でなければ、かういふ觀照は出來難い。海暮れて鴨の聲ほのかに白し。鴨の聲を「白し」と觀じた象徴味は他の追隨を許さない所がある。すべて芭蕉の作で象徴的な深みのある作は大概耳から得たものである。芭蕉は靜に瞑目して自然の神祕を聽いた。耳に依つて眞實を悟つた人である。(萩原井泉水)

四 いせの物がたり

一、東下り

昔男ありけり。その男身をやうなきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき國求めむとてゆきけり。



(筆谷桂條下)り下東の平業

もとより友とす
る人一人二人して
諸共にゆきけり。道
知れる人もなくて
惑ひゆきけり。三河
の國八橋といふ所
に到りぬ。そこを八橋といふことは、水の蛛手に流れ別れて木八つ
渡せるによりてなむ八橋とはいへる。その澤の邊の木の蔭におり

八橋
愛知縣碧海郡。
今知立町の東に
遺蹟あり。

居て乾飯くひけり。その澤に杜若いとおもしろく咲きたり。それを見て、或人のいはく、かきつばたといふ五文字を、句の上に据ゑて旅の心を詠め、といひければ、

から衣きつつなれにし妻しあれば

はるばるきぬる旅をしぞおもふ。



(筆一抱)ふ會に者行修平業

りぬ。宇津の山に到りて、我が入らむとする道はいと暗う細きに、葛かづらは茂りて物心細く、すすろなる目を見ることと思ふに、修行

と詠りければ
皆人乾飯の
上に涙落して、
ほとびにけり。
往き往きて
駿河の國に到

宇津の山
今宇津谷峠といふ。静岡縣安倍郡と志太郡との界。

者逢ひたり。かかる道にはいかでかおはするといふに、見れば見し人なりけり。京にその人の許にとてふみ書きてつく。

駿河なるうつ山邊のうつつにも

ゆめにも人の逢はぬなりけり。

富士の山を見ればさ月のつごもりに雪いと白う降り。

時知らぬ山はふじの嶺いつとてか

鹿の子まだらに雪のふるらむ。

その山は、ここに譬へば、比叡の山をはたちばかり重ねあげたらむ程して、なりは鹽尻のやうになむありける。

なほゆきゆきて、武藏の國と下つ總の國との中にいと大きな川あり。それをすみ田川といふ。その川のほとりに群れゐて、思ひやれば限なく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡し守は、はや船に乗れ。日も暮れぬといふに、乗りて渡らむとするに、皆人物わびしく



鹽尻

都鳥



て京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と足とあ
かき、鵜の大きさなる、水の上に遊びつつ魚をくふ。京には見えぬ鳥
なれば、皆人見知らず。渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを
聞きて、

名にしおはばいざ言とはむ都鳥

わが思ふ人はありやなしやと。

と詠めりければ、船こぞりて泣きにけり。(伊勢物語)

二、小野の御室

昔惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬
といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛にはその宮になむおはし
ましける。その時右馬頭なりける人を常におはしましけり。狩
は懇にもせで、大和歌にのみかかれりけり。今狩する交野の渚の院
の櫻殊におもしろし。その木の下におり居て、枝を折りて挿頭にさ

惟喬親王

文徳天皇第一の

皇子。小野宮と

稱す。(一五三二

年—一五三七

年)

水無瀬

今の大阪府三島

郡廣瀬村。

右馬頭

在原業平。

交野の渚の院

大阪府北河内郡

牧野村にあり

き。

して、上、中、下、みな歌詠みけり。馬頭なりける人の詠める、
世の中にたえて櫻のなかりせば

春のこころはのどけからまし。

となむ詠みたりける。又ある人の歌、

散ればこそいとど

櫻はめでたけれ

うき世になにか

ひさしかるべき。

とて、その木の下を立ちて歸るに、日

暮になりぬ。

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更く
るまで物語して、さてあるじの皇子入りて大殿ごもり給ひなむと
す。十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬頭よめる、



(藏院退不) 平 業 原 在

小野
京都府愛宕郡。

飽かなくにまだきも月の隠るるか
山の端逃げて入れずもあらなむ。

かくしつつまうで仕うまつりけるを、皇子思の外に御髪おろさせ給ひて、小野といふ處に住み給ひけり。正月に拜み奉らむとてまうでたるに、比叡の山の麓なれば雪いと高し。強ひて御室にまうでて拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしましければ、やや久しく侍ひて、古の事など思ひいで聞えけり。さても侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければえ侍らはで、夕暮にかへると、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや

雪ふみわけて君を見むとは。

となむ泣く泣く來にける。(伊勢物語)

三、さらぬ別れ

長岡
京都府乙訓郡向日町。

昔男ありけり。身はいやしけれど、母なむ親王なりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。一人子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。

さるほどに、師走ばかりにとみの事とて御文あり。驚きて見れば、こと言はなくて、

老いぬればさらぬ別れのありといへば

いよいよ見まくほしき君かな。

となむありける。これを見て馬にも乗りあへず參るとて、いといたう打ち泣きて道すがら思ひける、

世の中にさらぬ別れのなくもがな

千代もといのる人の子のため。(伊勢物語)

五 古文學に現はれた大和民族の根本性

儒教や佛教の感化を蒙らぬ我我生粹の日本人の祖先といふものは、色色な方面の性質を兼ね備へた、わだかまりの無い、さつぱりした人達であつた。無論中にはさうでない人もあつただらうが、大體さういへると思ふ。彼等には、男らしい、強い、剛壯なところもあつた。優美な、優しい、情に厚いところもあつた。又滑稽、洒落な性質もあつた。さうして彼等は明るい、清い、直なる心を以て仕事をして居つたのである。私は三種の神器は日本の國民性の標章になるもので、鏡は明るい心を表し、玉は清い心を、劔は眞直な心を表して居ると思ふ。吾等の祖先はかやうな心を以て働いて、何か過があればその罪穢を祓つて、さつぱりと舊惡を忘れ、そしてすがすがしい心持になつて新生活に進み入つた。飽くまでも陽氣で、ひげ目を見せず、

光明を追うた。大昔から朝廷で行はれた儀式の一つに、六月と十二月との大祓といふのがある。これは六月の晦日と、十二月の晦日とに、親王から大臣、諸役人、民百姓に至るまで、總べての日本人が、半年の間に觸れ犯した罪穢を祈り祓つて下さるといふ儀式である。その儀式に讀み上げる祝詞の大祓詞といふものの中に、かういふ事が書いてある。

安國と平けく知しめさむ國中に成り出でむ天の益人等が過ち犯しけむ種種の罪事は、天津罪とは畔放溝埋、樋放頻蒔、串刺生剝逆剝、屎戸、ここだくの罪を天つ罪と宣りわけて、國津罪とは生膚斷、死膚斷、昆蟲の災、高津神の災、高津鳥の災、畜たふし、蟲物せる罪、ここだくの罪出でむ、かく出でば、天つ宣言もて、大臣、天握之木を本打ち切り、末打ち断ちて千座置座に置き足はして、天津菅麻を本刈り断ち、末刈り切りて八針に取りさきて、

天津祝詞の太祝詞言を宣れ。かく宣らば、天津神は天の磐門を押し開きて、天の八重雲をいつの千別きに千別きて聞し召さむ。國津神は高山の末、短山の末に上りまして、高山のいほり、短山のいほりをかき別けて聞し召さむ。かく聞し召してば、皇御孫命の朝廷を始めて、天の下四方の國には、罪といふ罪はあらずと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つことの如く、朝のみ霧夕べのみ霧を朝風、夕風の吹き拂ふことの如く、大津邊に居る大船を舳綱解き放ち、艦綱解き放ちて、大海原に押し放つことの如く、彼方の繁木が本を焼鎌の敏鎌もちて打ち拂ふことの如く、残る罪はあらずと、祓へ給へ、清め給ふことを、高山の末、短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬にます瀬織津媛といふ神大海原に持ち出でなむ。かく持ち出で往かば、荒潮の潮の八百路の八潮路の潮の八百會にます速開津媛といふ

神持ちかか呑みてむ。かくかか呑みてば、氣吹戸にます氣吹戸主といふ神、根の國、底の國に氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちてば、根の國、底の國にます速佐須良媛といふ神、さすらひ失ひてむ。かく失ひてば、天皇が朝廷に仕へまつる官官の人等を始めて、天の下四方には、今日より始めて罪といふ罪はあらず、云云。

即ち、これで半年の間に犯した罪や穢はもう綺麗さつぱりと無くなつた。過去の罪穢に懸念なく、新しい心を以て進んで、世の爲、人の爲に盡せといふのである。この過去の罪惡に後髪引かれずして、側目も振らずに新しい道に入るといふ、中根東里の所謂、出づる月を待つべし、散る花を追ふ勿れといふ思想は、大和民族の根本的性質の一つで、江戸つ子の洒落な性質なども、この國民性の遺つたものであらうと思ふ。

中根東里
儒者。伊豆下田
の人、名は若思、
通稱貞右衛門。
陽明學を唱ふ。
明和二年二月歿
す。(二三五年
—二四二五年)

文武天皇云云
文武天皇元年八月御即位の時の宣命。續日本紀に出づ。

さて、かやうに罪を祓つて綺麗さつはりとなつて安心して、暢氣に遊べといふのかといふに、さうではない。かく綺麗さつはりとなつた上は、明るい、淨い、直なる誠の心を以て、益進んで光明ある事業をなせといふのである。文武天皇の嘗て下し賜うた宣命の中に、

明き、淨き、直き、誠の心もちて、いや進み進みて、緩み怠ることなく務めよ。

と仰せられたのがある。實に立派な御詞であるが、私は前の大祓の祝詞と、この文武天皇の宣命とを合はせて、我我大和民族の長へに肝銘すべき座右の銘とすることが出来ると思ふ。

かやうに強い所、優しい所、しやれた所を兼ね備へ、明るい、清い、真直な心を以て、積極的に、ひげ目なく、事業を爲した人は大昔の世に少からずあつた。素盞鳴尊もさうであつた。又大國主命などもさうであつた。大國主命が悪人の兄君にはいぢめられ、父君にはさいな

まれ、自然と戦ひ、蠻族と戦つて、出雲朝廷を建てられたのは、なかなか容易な事業ではなかつた。しかもその間にあつて、始終善い、正しい、光明のある事業を目的として進まれたのは、實にこの國民性を實現せられたものである。神武天皇もこれ等の國民的美質を遺憾なく發揮せられた御方である。日本武尊なども亦さうである。

日本武尊は非常に眉目秀麗なる貴公子であつた。さうして武勇絶倫の御方であつた。父帝の命によつて千里を獨往して、筑紫に熊襲の巨魁を誅戮せられ、大功を建てて都に歸られると、直に又東夷の征伐を命ぜられて打ち立たれた。程なく東夷を平げられて、歸るさに、近江の伊吹山の山靈の毒氣に中つて伊勢にて薨去せられたが、その薨ずる時にも、なほ陽氣な、積極的の光明性を失はないで、名高い「國思の歌」を詠まれた。

命の全けむ人はたたみごも平群の山の

伊吹山
滋賀縣阪田郡。
命の全けむ云
古事記中巻に出づ。
平群の山
奈良縣生駒郡。

熊櫛



熊櫛が葉を髻華にさせその子。

そして、薨じて後に尊の御靈が白鳥となつて天翔つて行かれたといふことである。日本武尊は武勇も優れ、智慧も優れ、文藝の才もなかなか優れて居られた。しかも明るく、清く、真直な、誠の心を以て君の爲、國の爲に盡され、艱難辛苦の間にあつて撓なく進まれた。これ等の點は皆それぞれに偉いけれども、私の特に面白い、あり難いと思ふのはこの「國思の歌」である。自分が死に臨みながら、遙に故郷人に言寄せて、命の全い健全人は、くよくよせず、平群の山に茂つて居るあの熊櫛の葉を髪にかざして、陽氣にあそび樂しめ、故郷人よ、これ我がいまはに臨んでお前達に望む所である」といはれたのは、その積極性、光明性、進んで止まざる、ひげ目の見えざる心持が見えて實に面白いではないか。儒佛の思想に累せられた後世の人間ならば、「亡き後に一遍の回向を頼む」とか、「生ある者の死ぬるのは據な

い」とかいふ所であらうが、神ながらの純粹の大和心を以て、「死ぬる者は死ぬ。俺は仕方がないが、達者な者は大いに陽氣に遊ぶが好い」といつて居られる。今の言葉でいふならば、飽くまでも生を樂しむ味ふが好いといふのである。實に愉快なうまい事をいはれたものである。

私は、もう一つこの熊櫛の葉をかざすといふ事に非常な興味を感じて居る。後の王朝の公卿達は、

百しきの大宮人はいとまあれや

櫻かざしてけふも暮しつ。

といふ歌の示すとほり、仕事の無いままに暢氣に櫻をかざして、今日も明日もと遊び暮したものであつたが、日本武尊は兵馬倥傯の世にあつて、熊櫛の葉をかざして遊べといはれた。櫻は美しい花であるけれども、脆い果敢ない花である。櫻の葉は面の艶は無いけれ

百しきの云云
新古今集に出て
たる山部赤人の
歌。萬葉集の歌
の改作。



月桂樹

ども、厚い、堅い、霜雪に堪へる堅實なものである。まづ西洋の月桂樹をつくりといつてもよい。月桂樹も結構である。櫻も結構である。けれども、私はそれよりも、二千年前に日本武尊の御歌に現はれた熊鷹の葉が、一層日本國民の心持を標章するに適して居ると思ふ。そこで熊鷹を櫻の花と相並べて、日本の標章にするのも亦面白いと思ふ。殊に日本武尊の薨後、その御靈が白鳥となつて大空高く天翔つて行かれたといふから、日本武尊を背景として、檜の葉に白鳥を配し、これを日本の國民性のおもなる一面、殊に文藝の方面の標章としたならば非常に面白いと思ふ。

とにかく、太古の日本人は堅い、柔い、強い、優しい、男性的、女性的、勇悍、優美、色色な方面の性質を備へ、そして明るい、清い、直な心を以て、飽くまでも陽氣に、積極的に進んで仕事するといふ質であつた。

(五十嵐力—作文三十三講)

五十嵐力
文學博士。早稲
田大學文學部
長。米澤市の人。
明治七年十一月
生まる。

六 美術と日本國民性 その一

美術は一國文化の華の開いたものである。およそ一國の文化は、その國民性を背景とするに至つて、始めて光輝を發するものであつて、過去を顧みれば、一國の文化には、必ずその國民性を背景とした大きな流が明瞭に認められる。

現代に於いては、自身がその社會の渦中にあつて、種種な文化の傾向を見てゐる爲に、如何なる文化が眞にその國民性を代表するか、判定に苦しむものである。繪畫に例を取らば、日本畫と油繪とに於いても、青年の或者は、油繪の方が現代の日本國民性に適するであらうと考へ、中年以上の或者は、日本畫こそ我が國民性によく適合すると考へるであらう。然しそれは人人の考へやうで、歐米の思想や文物に多く親しんで居る人人には、油繪が好まれ、過去の

日本文化に興味をもつ人には日本畫が好まれるのである。それ故、我が我が藝術と、その國民性との關係を考へようとするには、我が國民の文化や、趣味の傾向を知らなければならぬ。即ち過去の時代に溯つて、その時時の文化の變遷を見、藝術の變化の迹を尋ね、美術に現はれた我が國民性の如何を考察しなければならぬ。

我が國の古代には、如何なる藝術があつたか、遺作が極めて乏しいので、委しい事は無論わからないが、元來我が國民は風光明媚な自然の風趣に恵まれて、藝術をよく理解し味ふ力をもつてゐたから、一度優れた大陸藝術に接すると、勃然として我が藝術の振興を促し、自己獨特の長所を發揮したのである。

我が國に遺存する最古の優秀な藝術品としては、推古時代のものゝを挙げねばならぬ。これ等の藝術品には、内地で作られたものゝあれば、外國から傳來したものゝもある。然し、いづれにしても、所謂六

六朝

支那の四晉、東晉、宋、齊、梁、陳の六朝。

朝式のもので、これはいふまでもなく聖德太子の偉大な力によつて興隆されたものである。太子がその當時、出來得るかぎり、朝鮮を媒介として大陸の文明を吸収し、我が國の文化開發に盡されたことは、實に驚くばかりであつた。この時に於ける我が文化の變遷は、



樹下美人 (正倉院御物)

明治維新の時に際し、歐米文明の影響を受けて變化したよりも、更に著しく大陸文明に

化せられたことであつたらう。大和の法隆寺及びその寶物を見ても、よく當時の盛觀が偲ばれるのである。

次の奈良時代に於いては、所謂天平期を最盛期とし、建築にも彫

刻にも驚くべき發達が遂げられた。これは唐朝の進んだ文明が直接に我が國に輸入されたからである。推古時代の美術が一躍して奈良時代の美術になるには、その變化が餘に大き過ぎるけれども、本元の支那で、六朝式から隋の過渡期を経て唐朝式となつたので、我が國でもこの新來の文明を追うて、家屋調度の類から日常生活の様子まで唐風に擬ふこととなり、俄にこの飛躍を見たのであらう。随つて當時の支那思想もまた著く我が思想界を風靡したに相違ない。然し、かやうな風潮に乗じたのは、宮廷及び貴族の一部のみであつて都會を一步離るれば、國民の文化は極めて低く、無智蒙昧な有様であつたが、ともかくもこの唐朝文化の影響によつて、我が文化の根柢は益堅くなつた。

平安時代の初期は、なほ唐の影響を受けてゐたが、その中期から、漸く日本國民としての自覺を喚び起し、次第に外國文明から離れ

て、我が國の特色ある文明を築くに至つた。その頃から國文學が起つて漢文學に對立するやうになり、藝術に於いても、支那には見ることの出來ぬ特殊な流風が起つて、更に鎌倉時代に至つてこれが



聖衆來迎

完成された。されば我が日本文化の基礎は早く古代からあつたが、推古及び奈良時代に外國の影響を受け、更に平安及び鎌倉時代に至つて、それを純日本化して、我が國獨特の精華を發揮するやうに

なつたといふべきである。

平安時代は宮廷及び摺紳たちの文化であつたが、鎌倉時代には、更にその範圍が廣まつて普遍的性質を帶び、國民的藝術の發達に

定朝 佛工の名手。京都の人。法橋に叙せらる。
 運慶 佛師。康慶の子。備中法印と稱す。後鳥羽天皇の頃の人。
 湛慶 佛師。運慶の子。尾張法印と稱す。
 源氏物語繪卷 數種あり。最優秀なりと稱せらるるは藤原隆能の畫、世尊寺伊房の詞書と傳へらるるもの。
 信貴山緣起 四卷。第一卷は土佐判部大輔、第二卷以下は鳥羽偏正の筆と傳ふ。

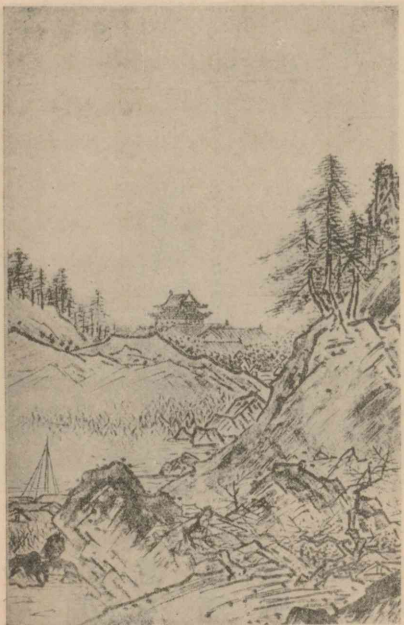
向つて一步を進めたのである。彫刻についていへば、天平時代はその精を極め能を罄してはゐるが、これはただ唐朝彫刻の摸倣である。然るに平安時代に定朝があらはれ、鎌倉時代に運慶、湛慶が出て、木彫界は一大進展をなし、ここに純日本彫刻が出現した。また繪畫について考へれば、早く佛畫は精妙な域に達してゐたけれども、平安時代に國文學の發達と關聯して、純鑑賞的の繪畫が現はれ、この流は平安朝の末から鎌倉初期に至つて益榮えて、遂に所謂大和繪の一體をなすに至つたのである。源氏物語繪卷、信貴山緣起、戲獸繪卷等はその代表的傑作である。

七 美術と日本國民性 その二

鎌倉時代の末から室町時代へかけて、藝術界に特殊な一派を生じた。即ち當時の新派ともいふべき、支那から輸入した宋元水墨畫

如拙 畫僧。明の人。應永年中來りて京都相國寺中亂芳軒に住す。
 周文 畫僧。字は等慶。近江の人。京都相國寺に住す。
 雪舟 畫僧。名は等。備中赤濱の人。永正三年八月寂す。(二〇八〇年—二一六六年)
 狩野派 日本畫の一派。支那の北宗畫より出て、剛健の筆致を用ひ、多く漢土の山水人物を畫く。明應の頃狩野正信に起る。

の一體で、禪宗趣味と關聯して我が藝術に一新機を開いた。この派には如拙、周文、雪舟などの大家が出て、その根柢を作り、更に狩野派が榮え、曾我、雲谷の諸派を生じて、舊來の大和繪は全く勢力を失つた。足利義滿から同義政の時代は、この流派の水墨減筆の一體の最盛期であつた。これもその趣味がよく當時の貴族たる武家の好尚に適したからである。



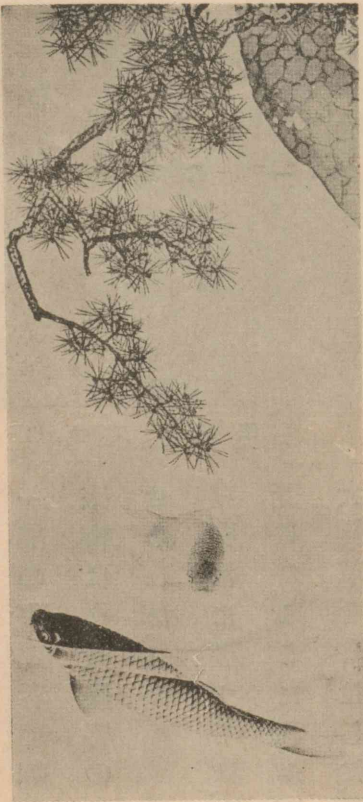
(雪舟筆) 水山景夏

然るに、世は所謂下剋上の戰國時代となり、社會組織に一大變革を來たし、尾張の一農民が關白となつて、一躍人臣の榮位を極めたのを始として、英雄豪傑は徒手空拳で一國一城の主となつたが、こ



れ等の人人は元來學問の修養に乏しかつたから支那趣味を解せず禪味を帯びた藝術などは鄰家の寶で、只天真爛漫から發程して、絢爛眼を奪ふやうなもの、豪放人野意を快うする儔のものでなければ満足しなかつた。ここに於いて、極彩色の花鳥動物などが描かれ、筆また當時の社會状態を描いた新しい風俗畫などが起つたのである。されば安土桃山時代は僅に三十年に過ぎなかつたけれども、我が藝術史上頗る重要な時代で、こ

れを日本の文藝復興の時期とも稱すべく、江戸時代の近世藝術の基礎はここに築かれたのである。



圓山應舉筆

日本趣味の發展を遂げた。繪畫は殊に隆盛を極め、幾多の流派を生じて、藝術の花の繚

亂たる春を現出した。

光悦に始まり宗達、光琳を経て抱一に至る一派の如きは、その範を大和繪に取り、更にこれを醇化したものである。また近世初期の風俗畫の一體の如きも、等しく範を鎌倉時代の繪卷物に取つたも

光悦
本阿彌光悦。光心の養嗣。書道に通ず。畫は海北友松に學び、土佐風を加味して光悦風を興す。寛永十四年二月歿す。(二二一七—二二九七年)
宗達
野野村氏。名は以悦、字は伊年。

對青軒と號す。生死年代詳ならず。

光琳

尾形氏。名は方祝。狩野常信に學び、野野村宗達の風に倣ひ、又古土佐、及び本阿彌光悅を慕ふ。享保元年六月歿す。(二二三年—二三七年)

抱一

酒井氏。名は忠因、鶯村と號す。西本願寺に入り權大僧都に任ぜられ、後江戸に住す。文政十一年十二月歿す。(二四二一年—二四八年)

浮世繪

當時の風俗を主として寫せる繪畫。寛永の頃岩佐又兵衛に起



岩佐又兵衛筆

のである。殊に江戸趣味の上に作られた浮世繪版畫の如きは、平民の藝術として大いに榮えた。圓山、四條の諸派も江戸時代に於ける特殊な畫風であつた。その他、長崎からはひつて來た西洋の畫風は僅ながら、一部の研究者に刺戟を與へ、支那の南宗畫は文人墨客の間に行はれて珍とせられた。
明治に至つては、西洋藝術の影響を受けて、ここに我が固有の藝術上一大變革を來たした。元來わが國の藝術は長い歴史をもつてゐるので、一時は外來の作風に傾いても、暫くしてまた日本的趣味に復るのが常である。現代は各人の考に依つて各自の藝術を研き、舊來の日本畫も

る。

圓山派 近世に於ける日本畫の寫生風の一派。圓山應舉に始まる。

四條派

江戸時代の繪畫の一派。松村吳春を祖とす。

南宗畫

唐の王摩詰を祖とす。江戸時代に傳來して専ら文人の間に行はれしを以て、又文人畫といふ。

新來の油繪も共に榮えてはゐるが、然し油繪も日本に於いて描かれる以上は、日本の特色を發揮すべきで、外國のものとは違はねばならぬ。實に現代の油繪には日本趣味に傾いたものが少くない。また日本畫も舊來のものとは違つて、西洋畫の影響をうけて、大いに面目を一新した。されば現代では、日本畫も油繪も共に現代文化を背景として作られてゐるもので、今の青年が油繪を愛し、中年以上のもものが日本畫を賞するの、よく現代藝術鑑賞の兩面を現はしてゐるのである。
要するに、日本藝術は常に大陸藝術の影響を受けて、これを日本化して進歩發達したものであつて、現代の藝術もまた外國藝術を更に日本化することによつて優秀なものともなり、特殊な藝術ともなるべきである。
かくの如く外國の藝術を日本化することは、即ち國民性を背景

としての大きな流があるからである。日本人の祖先以來承継いで來た獨得の國民性は、不知不識の間にその趣味性格の上に大いなる影響を與へてゐるのである。然し藝術趣味はそれぞれ人人によつて異なるものであるから、各その好みに従つて藝術を鑑賞し創作すべきで、各種の異なつた流風を生じてこそ始めてその國の藝術は榮えるのである。しかもよく一國の藝術として誇り得るものは、外國藝術の摸倣ではなくて、その國民の文化を背景とし、國民性によつて作られた作物でなければならぬ。

國土が一國文化の上に及ぼす力は偉大であつて、國民性もまたその支配をうけ、藝術もまた國土の恩恵に浴するとすれば、假令一時は外國文化の影響を被つても、決して外國文化そのものと同じにはならぬ。これが、藝術がその國國に依つて大いなる相違を生ずる所以である。(藤懸靜也)

藤懸靜也
茨城縣の人。國
寶鑑査官、東京
帝國大學文學部
講師。

八 歌謠に就いて

我が國上古の音樂には、宗教の音樂として神樂があり、軍樂として久米歌、吉志舞等があり、即興的に歌ふものとして歌謠があつたが、いづれも皆聲樂ばかりで、器樂といふものは一つもなかつた。實に日本民族は、その原始状態に於いて聲樂的民族であつた。後になつて支那から進歩發達した形式的器樂が輸入されて、大いに器樂の用法にも熟練したけれども、それにも係はず、支那のやうに純器樂として發達することを得ないで、何時の間にか、又聲樂化してしまつた。奈良朝や平安朝の初期には、支那の雅樂が純器樂として日本に入り、我が邦の上流社會を風靡した程の勢であつたが、平安朝の中期から、これが多少日本化して來ると、催馬樂や、朗詠や、今様のやうに聲樂となつてしまつたのである。鎌倉時代から以後、室町

江戸の時代に發達したものの例へば、謠曲、宴曲、小唄等も、悉く聲樂であることはよく人の知る所である。

神樂は今も尙神事に行はれて居るが、今の所謂神樂といふものには二種類ある。一は宮中賢所、伊勢神宮その他の大社で行はれる極めて嚴肅なものであつて、音樂を主としてゐる。これに反して他の一は、鎮守の社等で行はれて、俗に「里神樂」又は「お神樂」と呼ばれる舞踊を主としたものであつて、多くは滑稽なものである。宮中賢所や伊勢神宮などで行はれる正神樂を聽くと、實に神聖な嚴肅な、形式的なものであつて、頗る進歩した儀式を備へて居るが、かやうな形式的なものが、原始的な古代から存在して居ようとは考へられない。歴史を按じて見ても、これは平安朝中期の新作である。又里神樂の方も、その平民的なこと、舞踊的なこと、内容本位なこと、滑稽的なことに於いて、原始的な所はあるけれども、今日行はれてゐる里

神樂は、その技巧に於いて、また劇的仕組に於いて、決して原始的のものではない。殊に現時の里神樂に就いて感ずることは、そのやり方が頗る支那元代の劇に似てゐることである。一體支那元代の雜劇は、日本へ入つて鎌倉時代の田樂や猿樂の一部の起原をなして居るものであるが、今日の里神樂は、恐らくこれ等の田樂などの影響を受けて發達して來たものであらう。予は種種の方面の研究からして、日本上古の原始的な神樂の真相を推測して見るのに、少しも劇的な仕組などはなくて、頗る平民的な、舞踊本位な、滑稽的なものであつたに相違ないと思ふ。

戰陣に用ゐた歌舞、即ち軍樂にも、古くから種種あるが、その中最も名高いのは久米歌と吉志舞とである。前者は神武天皇が大和東征の時に、三軍を鼓舞するためにお作りになつたもので、頗る勇壯な舞が附いてゐる。その舞を久米舞といふ。後者は神功皇后が三韓

征伐の御凱旋に際して出來た舞曲である。久米舞の方は、今もなほ毎年紀元節に宮中で行はれる。

上古には非常に澤山の歌謠があつたことは、記紀を見ると明らかである。いづれも皆、よく質實にその情緒を歌ひ出してある。これらは總べて即興的に歌つたもので音楽的であつたのである。それが中世になつて、形式的に發達するに従つて二途に分れて來た。その一は、どこまでも音楽として取り扱つて行かうとするものであつて、これは純然たる聲樂となつてしまつた。さうして中世の歌謠となつたのである。その二は、音楽を離れて、文學として發達して來て、五七調の長歌や三十一文字の短歌となり、人人はこれを讀み又は見て心に樂しむといふ風になつてしまつたのである。

(田邊尙雄——日本音楽講話)

田邊尙雄
理學士、文學士。
大阪の人。早稲
田大學講師。

九 うたひ物

一、神樂歌

劍



神樂
は誰が子ぞ。(本)
しろがねの目貫の太刀をさげ佩きて、奈良の都をねるは誰が子ぞ。ねる石の上、ふるや男の太刀もがな。組の緒垂でて宮路かよはむ。宮路かよはむ。(末)

二、催馬樂

葛城

かづらきの、寺の前なるや、豊浦の寺の、西なるや。(一段) 榎の葉

葛城寺
奈良縣添上郡に
舊址あり。
豊浦寺
同縣高市郡にあ
り。今廣嚴寺と
いふ。

都良馨
文章博士。博覽強記、最も詩文に長じ、吟詠神に入ると稱せらる。元慶三年卒す。(一五〇四年—一五三九年)
志貴皇子
又施基皇子に作る。天智天皇の第二皇子、光仁天皇の御父。靈龜二年八月薨す。光仁天皇の朝春日宮天皇の尊號を追贈せらる。(一三三七年—一三七五年)

菅文時
文章博士。菅原道真の孫。博學洪才當時に冠たり。天徳四年九月薨す。世に菅三品と稱す。(一五五九年—一六四一年)

井に、白壁しづくや、眞白壁しづくや、おしとんど。おしとんど。
(二段) しかしてば、國ぞ榮えんや。わ家らぞ富せんや。おしとんど。おしとんど。(三段)

三、朗詠

早春

都良馨

氣霽レテハ風新柳ノ髮ヲ梳リ、氷消エテハ浪舊苔ノ鬚ヲ洗フ。

志貴皇子

いはそそぐたるみのうへの早蕨の

もえいづる春になりにつけるかな。

花

菅文時

日ニ瑩カレ風ニ瑩カル、高低千顆萬顆ノ玉、枝ヲ染メ浪ヲ染ム、表裏一入再入ノ紅。

見てのみや人にかたらむさくら花

素性法師

手ごとにをりて

家づとにせむ。

首夏

白樂天

甕頭ノ竹葉ハ春ヲ經テ熟シ、階底ノ薔薇ハ夏ニ入ツテ開ク。

源順

わが宿のかきねや春を

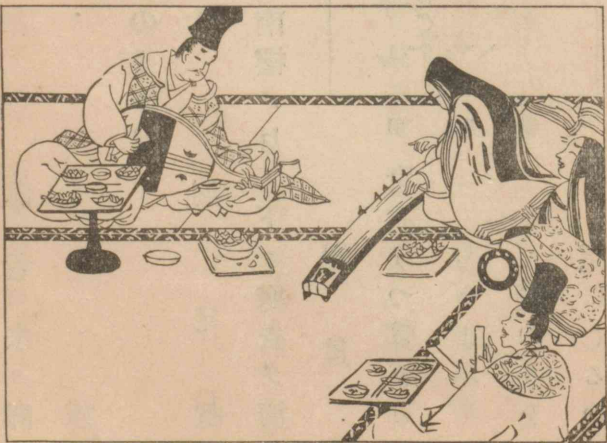
へだつらむ夏きに

けりと見ゆるうの花。

八月十五夜

紀長谷雄

十二廻ノ中コノ夕ベノ好ニ勝ルハナク、千萬里ノ外各ワガ



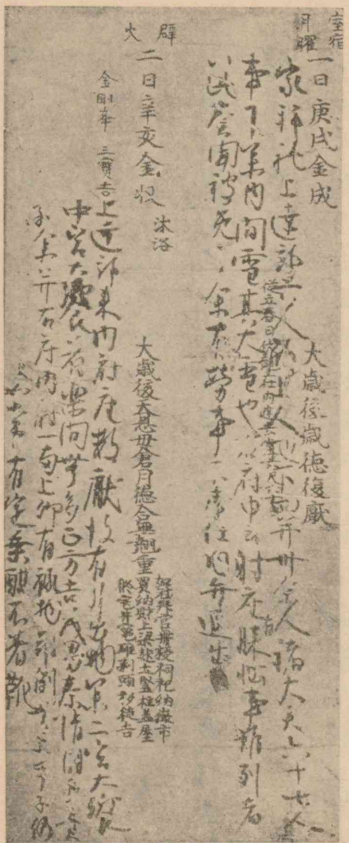
結管人貴

源順
舉の子。和歌に巧みに文を善くす。梨壺五人の一人。永觀元年四月卒す。(一五七一年—一六四三年)

攝政殿
藤原頼通。道長の長子、世に宇治關白と稱す。承保元年二月薨す。(一六五二年—一七三四年)殿の御前藤原道長。

一〇 法成寺

今は御心地例ざまになりはてさせ給ひぬれば、御堂の事思し急がせ給ふ。攝政殿、國國まで、さるべき公事をばさしおきて、まづこの御堂のことを先に仕うまつるべき仰言のたまふ。殿の御前も、この



藤原道長筆

度生きたるは別ことならず、この願の協ふべきなめりとのたまはせて、

他事なくただ御堂におはします。

方四町をこめて、大垣にして瓦葺きたり。さまざまに思しおきて

急がせ給へば、夜の明るるも心もとなく、日の暮るるも口惜しうお



法成寺建築の古畫

ぼされて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘るべきさまを思しめぐらし、木を栽ゑなべさせ、さるべき御堂御堂、方方さまざま造りつづけ給へり。御佛はなべての様にやはおはします。丈六の金色の佛を數も知らず造りなべ、北南と馬道をあけて、道をととのへ造らせ給ふ。鶏の鳴くも久しくおぼされ、宵曉の御行もおこたらず、やすきいも大殿ごもらず、ただこの御堂のここのみ深く御心にしませ給へり。

日に多くの人人参りまかんでして立ちこむ、さるべき殿ばら

をはじめ奉りて、宮宮の御封、御庄どもより、一日に五六百人、千人の夫どもを奉るも、人の數多かることをば賢きことにおぼしたち、國の守ども、地子、官物はおそなはれども、只今はこの御堂の夫役、材木、檜皮、瓦など多く參らすることを、我も我もと競ひ仕うまつる。

大方近きも遠きも參りこみて、品品、方方、あたりあたり、に仕うまつる。或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかり並み居て仕うまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼり居て、大きな木どもには、太き綱をつけて、聲を合はせて、えさまさと引き上げさわぐ。御堂の内を見れば、佛の御座造りかがやかす。板敷を見れば、木賊、椋の葉などして、四五十人並み居て、手ごとに磨き拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども數をつくしたり。又老いたる翁などの、三尺ばかりの石を心に任せて、切りととのふるもあり。池を掘るとて、四五百人おりたち、山を

大津

滋賀縣滋賀郡

梅津

京都 葛野郡

須達長者

釋迦在世當時の

舍衛國の富者。

波斯匿王の大

臣。

祇園精舍

印度の寺の名。

釋迦説法の道

場。

疊むとて五六百人のぼり立ち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫びのしり引きもてのぼる。鴨河の方を見れば、筏といふものに、樽材木を入れて、棹さして心地よげに歌ひののしりてもてのぼるめり。大津、梅津の心地するも、西は東といふことはこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて、率て來れど沈まず。すべていろいろ様様いひ盡し、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍造りけむもかくやありけむと見ゆるを、冬の室、夏の風、各ことごととなり。

かかる御勢にそへて、入道させ給ひて後は、いとど勝らせ給へり。と見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有様かなと、近う見奉る人はたふとみ、遠う見奉る人は遙に拜み參らす。今はこの御堂のあたりの木草ともならむと思へる人のみ多かり。そなたさまに赴けば、海の浪も柔に立ちて、この御堂の物をもて運ばせ、河も

水澄みて快く浮べもて參ると見ゆ。(榮華物語)

かどでしたる處はめぐりなどもなくて、假初の茅屋の葎などもなし、簾かけ、幕などひきたり、南は遙に野の方見やらる。ひんがし西は海近くていと面しろし。夕霧たち渡りて、いみじうをかしければ、朝いなどもせず、かたがた見つつ、ここを立ちなむ事もあはれに悲しきに、同じ月の十五日、雨かさくらしふるに、境を出でて、しもつさの國のいかだといふ處にとまりぬ。庵なども浮きぬばかりに雨ふりなどすれば、恐ろしくていもねられず、野中に岡だちたる處に、ただ木ぞ三つ立てる。その日は雨にぬれたる物ども乾し、國に立ちおくれたる人人まつとて、そこに日を暮しつ。

十七日つとめて立つ。昔しもつさの國に、まのの長ながといふ人住みけり。ひさ布を千むら萬むら織らせ、さらさせけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとして、大きなる柱、川の中に四つ立てり。人人歌よむを聞きて心のうちに、

朽ちもせぬこの川柱のこらずば昔のあとをいかで知らまし。

(更級日記)

一一 國家と社會的意識

我我は我我の子孫と共に、同一細胞の分裂に由りて生じた者である。生物は全種屬を通じて、同一の生物と見ることが出来る。生物學者は今日、生物は死せずといつて居る。意識生活に就いて見てもその通りである。人間が共同生活を營む處には、必ず各人の意識を統一する社會的意識といふものがある。言語、風俗、習慣、制度、法律、宗教、文學等はすべてこの社會的意識の現象である。我我の箇人的意識はこの中に發生し、この中に養成されたもので、この大いなる意識を構成する一細胞に過ぎない。知識も、道德も、趣味も、すべて社會的意義をもつて居る。最も普遍的なるべき學問すらも社會的因襲を脱し得ない。今日各國に學風といふものがあるのはこれが爲である。されば、所謂箇人の特性といふものも、この社會的意識といふ

基礎の上に現はれて來る多様な變化に過ぎないかに奇抜なる天才でも、この社會的意識の範圍を脱することはできぬ。反つてそれらの天才は社會的意識の深大なる意義を發揮した人人である。眞に社會的意識と何等の關係なきものといへば、狂人の意識の



西田幾多郎

如きものに過ぎぬ。右の如き事實は誰も拒むことはできぬが、さてこの共同的意識といふものが、箇人的意識と同一の意味に於いて存在するとして、一の人格と見るこ

ヘフディング
者。コペンハーゲン大學の哲學教授。西曆一八四三年生まる。

とが出来るか否かについては種種の異論のあるところである。ヘフディングなどは、統一的意識の實在を否定し、森は木の集合で、これを分てば森といふものがない。社會も箇人の集合で、箇人の外に社會といふ獨立なる存在はないといつて居る。然し分析した上で統一が實在せぬから統一がないとはいはれぬ。箇人の意識でも、これを分析すれば別に統一的自己といふものは見出されないが、然し統一の上の一の特色があつて、種種の現象はこの統一に由つて成立するものと見做されねばならぬから、一の生きた實在と看做するのである。社會的意識も同一の理由に由つて一つの生きた實在と見ることができる。社會的意識にも箇人的意識と同じ様に、中心もあり、連絡もあり、立派に一の體系がある。唯箇人的意識には肉體といふ一の基礎があつて、これが社會的意識と異なる點であるが、腦といふものも決して單純な物體ではなく、細胞の集合であるから、社會が箇人といふ細胞に由つて成つて居るのと違ふ所はない。

かく社會的意識といふものがあつて、我我の箇人的意識はその一部であるから、我我の要求の大部分はすべて社會的である。若し

我我の慾望の中から、その他愛的要素を去つたならば、殆ど何物も残らない位である。我我の生命慾も、主なる原因は他愛にあるを以て見ても明かである。我我は自己の満足よりも、反つて自己の愛する者、又は自己の屬する社會の満足に由つて満足されるのである。元來我我の自己の中心は箇體の中に限られたものではない。母の自己は子の中にあり、忠臣の自己は君主の中にある。自分の人格が偉大となるに従つて、自己の要求はいよいよ社會的となつてくるのである。

今少しく社會的意識の階級に就いて述べて見よう。我我の社會的意識には種種の階級がある。その中最少であつて直接なものは家族である。家族とは我我の人格が社會に發展する最初の階級といはねばならぬ。男女相合して一家族を成すのは、單に子孫を遺すといふよりも、一層深遠なる精神的目的をもつて居るのである。人

類といふ典型より見たならば、箇人的男女は完全なる人ではない。男女を合したものが完全なる一人である。男子の性格が人類の完全なる典型でないやうに、女子の性格もまた完全なる典型ではない。男女の兩性が相補うてこそ完全なる人格の發展が見られるのである。

然し我我の社會的意識の發達は、家族といふやうな小團體の中にのみ限られるものではない。我我の精神的並に物質的生活は、すべてそれぞれの社會的團結に於いて發達することが出来るのである。家族に次いで我我の意識活動の全體を統一して、一人格の發現とも看做さるべきものは國家である。國家の目的に就いては種種の説がある。或人は國家の本體を主權の威力に置き、その目的は單に、外は敵を防ぎ、内は國民相互の間の生命財産を保護するにあると考へて居る。又或人は國家の本體を箇人の上に置き、その目的

は單に箇人の人格發展の調和にあると考へて居る。然し國家の眞正なる目的は、第一の論者のいふやうな、物質的で又消極的なものではなく、又第二の論者のいふやうに、箇人の人格が國家の基礎でもない。我々の箇人は反つて一社會の細胞として發達して來たものである。國家の本體は我々の精神の根柢であり、共同的意識の發現である。我々は國家に於いて人格の大なる發展を遂げることが出来るのである。國家は統一した一の人格であつて、國家の制度、法律は我々の共同意識の意志の發現である。我々が國家の爲に盡すのは偉大なる人格の發展完成の爲である。又國家が人を罰するのは復讐の爲でもなく、社會安寧の爲でもない。その人格に犯すべからざる威嚴がある爲である。

今日の處では、國家は統一した共同的意識の最も偉大なる發現であるが、我々の人格的發現は此處にとどまることは出来ない。尙

Polo

ボウロ

派

倫理宗教を中

心とし、窮理

よりも實踐を

重んじ、克己

主義、世界主

義を取るも

の。西曆前四

世紀末、セー

の創唱。希

臘羅馬に勢力

ありき。

Stoic

西田幾多郎

哲學者。文學博

士。京都帝國大

學名譽教授。

一層大いなる者を要求する。それは即ち人類を打して一團とした人類社會の團結である。かくの如き理想は已にパウロの基督教に於いて、又ストアック學派に於いて現はされて居るのである。只この理想は容易に實現されるものではない。今日はなほ武裝的平和の時代である。

遠き歴史の初から人類發達の迹をたどつて見ると、國家といふものは人類最終の目的ではない。抑も人類の發展には一貫の意味目的があつて、國家はその一部の使命を充すために興亡盛衰するものであるらしい。しかし眞正の世界主義といつても、各國家が無くなるといふ意味ではない。各國家が益強固となつて各自の特徴を發揮し、以て世界の歴史に貢獻する意味である。

(西田幾多郎—善の研究)

一二 詩聖杜甫

盛唐の詩人はいづれも高材逸足斯道の選手たるが中に、天馬空をゆく概あるは詩仙李白なり、香象海を渉る觀あるは詩聖杜甫なり。



杜甫（寺崎廣業筆）

杜甫は忠君愛國の詩人と稱すべきと共に、又家庭的詩人といふを得べし。彼の全集には、事の國家、帝王、時事に關するもの最も多く、これに次いで家族に關するもの多し。世にその國を愛してその家を受せざるものなく、その君に忠にしてその家族に無情なるものあらず。彼の眼中には、國は家の擴大せられたるものにして、家は國の縮小せられたるものなり。彼の忠

李白
字は太白、青蓮と號す。隨州襄陽紀の人。志氣宏放、逸才あり。飲中八仙の一。西曆七〇一年（西曆七〇一年）一七六二年）
杜甫
字は子美、少陵と號す。襄陽の人。俗に杜牧に對して老杜と稱せらる。西曆七一二年一七七〇年）

君愛國は抽象的にあらずして、その妻子弟妹を愛するの情を推し及ぼしたるものなり。支那の詩人、上は詩經より下は明清の諸家に至るまで、その家に對して多少の詩思を寄せざるものなしといへども、いまだ彼が如き家庭的詩人を見出だす能はざるなり。試にその「進艇」の作を見よ。

南京、久客耕南畝、北望傷神坐北窓、晝引老妻乘小艇、晴看稚子浴清江、俱飛蛺蝶元相逐、竝蒂芙蓉本自雙、茗飲蔗漿携所便、瓷甕無謝玉爲缸。

これ成都に於ける浣花草堂生活中の消息なり。その一家和樂の狀は千載の下なほ活躍するを覺ゆ。夫婦小艇に乘じ、稚子清江に浴す。巖上の蛺蝶は俱に飛び、水邊の芙蓉は蒂を竝ぶ。先生貧なりといへども、その樂しみ決して貧ならざるなり。人類ありて以來、詩人多からずとせず。然も彼が如き清福を贏ち得たるもの、それ幾許かある。

成都
支那四川省の首都。
浣花草堂
浣花溪なる杜甫の家の稱。

その江村卜居の作中句あり。曰はく「老妻畫紙爲碁局、稚子敲針作釣鉤」と。貧家の生活も此に至りてむしろ羨むべきを見る。もしそれ彼が春望の五律の如き、

國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心、烽火連三月、家書抵萬金、白頭搔更短、渾欲不勝簪。

如何なる鐵石の心腸を有する者も、誦し來たりて黯然たらざるものあらむや。詩としても絶調なり、情としても絶調なり。「家書抵萬金」の一句は眞に彼の胸奥より涌き出でたる眞情なり。同時にまた「遣興」の詩あり。

驥子好男兒、前年學語時、問知人客姓、誦得老夫詩、世亂憐渠小、家貧仰母慈、鹿門携不遂、雁足繫難期、天地軍麾滿、山河戰角悲、倘歸免相失、見日敢辭遲。

彼の心は實にこの稚子に惓惓たりしなり。又「元日示宗武」の作に曰

はく、

汝啼吾手戰、吾笑汝身長、處處逢正月、迢迢滯遠方、飄零還柏酒、衰病只藜床、訓諭青矜子、名慙白首郎、賦詩猶落筆、獻壽更稱觴、不見江東弟、高歌淚數行。

前詩は至德二載の春にして、即ち彼が四十五歳の作、後詩は大曆三年正月元日、即ち彼が五十七歳の作なり。僅に父の詩を誦するを學びたる驥子も、今は一箇の青年となりぬ。吾人はこれを讀んで、如何に彼がその子に愛著したるかを知り、又その同胞に眷眷たるかを知るなり。

彼の愛はその妻子のみならず、實に弟妹に及べり。かの同谷縣七歌のうち第三首と第四首とは、弟と妹とを題目とせり。有弟有弟在遠方、三人各瘦何人強と。又いはく「有妹有妹在鍾離、良人早歿諸孤癡」と。その他集中に散見する彼が同胞を懷ふの詩、枚舉に遑あらず。

至德二載
唐の肅宗の即位
二年。
大曆三年
同代宗の即位六
年。

彼や眞に家庭的若しくは家族的詩人たるに愧ぢざるなり。彼は徹上徹下人事的詩人なり。如何なる場合にも人間を主題とすることを忘れざるなり。或は國家の上において、或は君臣の上において、或は交友の上において、或は家族の上において、或は自己の上において、その接觸する方面には、時と場合とによりて幾多の相違あるも、到底人間を離れては彼の詩あらざるなり。人は唯人を以てその伴侶となすもの、杜甫においてこれを見る。

彼は天然と没交渉にあらず。然も彼は天然を天然として觀察せず、これを人事の背景として觀察せり。否切言すれば、彼は天然をも人事化せずんばやまずといふも妨なかるべし。これ彼が王摩詰一流の詩人とその趣を異にする所以なり。

彼は天然に對しても異常なる炯眼を有したり。然して他人の千百言にしてなほ盡す能はざる所のもの、彼は唯一兩句にして十二

王摩詰
王維のこと。摩詰はその字。尙書右丞に至る。詩人にして畫手。(西曆六九九年—七五九年)

分の諒會を與ふ、彼はその炯眼に匹敵する偉大なる用語の力をも有せり。然して彼の擅場は精緻巧妙なる天然の小幀密畫にあらずして、大筆淋漓一掃的の描寫にあり。例せば「野望」の五律の如き、

清秋望不極、迢遞起層陰、遠水兼天淨、孤城隱霧深、葉稀風更落、山迥日初沈、獨鶴歸何晚、昏鴉已滿林。

かくの如く描寫雄大にして、始めて彼の本色を發揮するに足るなり。然して吾人はこの詩を誦して、言外に志士遲暮の感慨を會取せざらんとするも能はず。彼は唯「獨鶴歸何晚」の一句を挿みて、忽ち天然を人事化し了れり。これ實に彼の慣用手段なり。更に旅夜書懷の作を見よ。

細草微風岸、危檣獨夜舟、星垂平野闊、月涌大江流、名豈文章著、官應老病休、飄飄何所似、天地一沙鷗。

江頭孤舟を泊し、自ら身世を願望して、天地一沙鷗に比す。その志復

悲しむべからざらんや。

彼は實に花に涙を濺ぐ詩人なり、鳥に心を驚かす詩人なり。彼は實に天然を天然として觀る能はざる詩人なり。

(德富蘇峯——杜甫と彌耳敦)

德富蘇峯
名は猪一郎。熊本縣の人。文久三年正月生まる。貴族院議員。久しく國民新聞社長兼主筆として健筆を振ひしが最近辭して大阪毎日新聞の社長たり。

琵琶行

潯陽江頭夜送客，
舉酒欲飲無管絃。
忽聞水上琵琶聲，
小絃切切如私語。
間關鶯語花底滑，
凝絕不通聲暫歇。
銀餅乍破水漿迸，
四絃一聲如裂帛。

楓葉荻花秋瑟瑟，
醉不成歡慘將別。
主人忘歸客不發，
嘈嘈切切錯雜彈。
幽咽泉流水下灘，
別有幽愁暗恨生。
鐵騎突出刀槍鳴，
東船西舫悄無言。

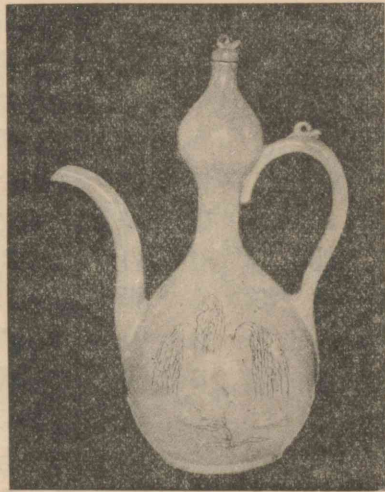
白樂天

主人下馬客在船，
別時茫茫江浸月。
大絃嘈嘈如急雨，
大珠小珠落玉盤。
水泉冷澁絃凝絕，
此時無聲勝有聲。
曲終收撥當心畫，
唯見江心秋月白。(下略)

一三 朝鮮の美術

私は朝鮮の藝術特にその要素とも見られる線の美は、實に彼等が愛に飢ゑた心の象徴であると思ふのである。美しく長く長く引く朝鮮の藝術の「線」は、實に連連として訴へる心そのものである。彼等の怨も、彼等の祈も、彼等の求も、彼等の涙も、その線をつたつて流れるやうに感ぜられる。一佛像を想ひ浮べても、又一陶器を擇んでも、吾吾はこの朝鮮の線に觸れない場合はない。涙にあふれる諸の訴がこの線に託せられてゐる。彼等はその寂しい心持と、何ものかに懐れる苦しみの情とを、美しくも又ふさはしくも、それ等の長くとをやかな線に含めたのである。強大な泰然とした支那の藝術の「形」の美の前に、その「線」の美は實により對比であらう。彼等は美しさに寂しみを語り、寂しみに美しさを含めたのである。追迫せられ、抑

壓せられた彼等の運命は、止むなく寂しみと慄れとに慰めの世を求めたのである。悲母の観音は彼等の靈の慰めであつた。優しく柔かな高麗の磁器は日日の楽しい友であつた。余はその藝術を想ふ毎に、にじみ出る涙を想はない時はない。それ等の製作者が何を求め、何を現はさうとしたかを知る朝鮮美ものは、愛の心を彼等に贈らずに品はゐられぬであらう。弱さを嘲ることが何の誇となり得よう。彼等の寂しさは心の底から滲み出てある。それは切なる生命の聲であつた。かかる經驗がその藝術を永遠のものにし、その作品を永劫の美に導いたのである。



し、眞を理解しようとする。然し藝術的意識が強まつて來た今日、不思議にも一つの美の世界が吾の傍にあるのを見逃してゐる。却つて人情を異にし、國を隔てた西歐の藝術に對しては、誰も明かな概念を持つてゐるやうに見えるが、血を交へ氣質を同じくする朝鮮の藝術に就いて、明かな理解を持つ人は非常に少い。否、そこには殆ど何物も無いかの様にさへ考へてゐる。

然し朝鮮がその藝術によつて、卓越した位置を東洋文化の中に認められる日は、間もなく來るであらう。何故今日までそれが一般から見棄てられてゐたのであらうか。



法隆寺金堂

美に對しては鋭敏であると自らも思ふ吾吾が、わけても吾吾に近い民族の藝術に就いて、殆ど何の意識をも持たないといふのは、如何なる譯であらうか。遠い外國の人人に、朝鮮が「隱者の國」として永く封ぜられてゐたのは止むを得ないであらう。然し交通の容易な



百濟觀音

吾吾の間に、それが失念せられてゐるのは、むしろ奇異な現象ではないか。朝鮮の藝術に對して、殆どその價值を意識しない吾吾の心理情態には、非常な矛盾があるとさへ考へられる。日本が國寶として世界に誇り、世界の人人もその美を是認してゐる作品の多くは、そもそも誰の手によつて作られたのであるか。中でも國寶の國寶と呼ばれねばな

法隆寺

法相宗の大本山。奈良縣生駒郡法隆寺村にあり。推古天皇十五年聖德太子の創建。建築諸佛像等上古美術の好典範たり。
中宮寺
同村にあり。推古天皇十五年聖德太子の創建。
廣隆寺
眞言宗古義派の一本山。京都府葛野郡大秦村にあり。推古天皇十一年秦河勝の創建。
正倉院
東大寺大佛殿の北にあり。

らぬものの殆どすべては實に朝鮮の民族によつて作られたのではないか。これに次いで支那のものが多いことは、今更いふを俟たぬ。これは史家も實證する紛れもない事實である。

例へば法隆寺の金堂を飾る最も優秀な佛像は、今「百濟觀音」と呼ばれてゐるではないか。長く祕傳せられた夢殿に在る同じ觀音の立像も、その様式からしても、美からしても、まぎれもない朝鮮の作品ではないか。中宮寺や、廣隆寺に保存せられてゐる、あの美しい物おもひがちな彌勒の半跏像も、様式は支那に起因しても、恐らく朝鮮から傳來したものであらう。日本に渡つたものの中で、最も美しいものの一つである玉蟲の厨子は、朝鮮の名譽をこそ永遠に傳へるであらう。

工藝品に至れば殆ど列擧するに暇がないであらう。聖德太子千三百年祭の法會の折に、特に展覽せられた多くの御物、又は正倉院

に傳藏せられてゐる種種なる古作品、それ等の物の大部分は、恐らく朝鮮から傳へられたものであらう。比較的よく古法を保存してゐる朝鮮の作品には、それ等に類似する紋様や手法を今も尙見ることが出来る。嚴密に日本の國寶から、朝鮮の作品又はその遺風を傳へたものを除去してしまふならば、如何にそれは殘少く寂寞としたものになるであらう。かくする事は、あの卓越した推古朝の黄金時代を日本史から抹殺する事ではないか。日本は朝鮮の美に飾られた日本である。若しもあの賢明な聖德太子が朝鮮の文化を受け容れなかつたとしたら、日本は誇るべき國寶の幾百を失つた事であらう。推古朝の文化を追憶する時、吾吾は朝鮮の文化を欽慕しつつあるのである。時間には推移があり、國情には變化があるのであらう。だが日本の文明が朝鮮の美に濫められて生まれたといふ事實こそは不變である。

しかも人は遠い過去の朝鮮にのみ藝術があり、文化があつたと思つてはならぬ。高麗の朝はその陶磁器に於いても既に不滅ではないか。その時代は學藝の時代であつた。あの精確な、立派な高麗版の大藏經より、より優れた佛典の編纂は、日支兩國を通じて一つもないではないか。末期であるといつて多く省みられない李朝に於いても、私は不滅な作品を幾度も目撃した。その木工品や、磁器の或物は眞に永遠である。あの日本の茶器が、しばしば南朝鮮に於いて作られた日常の器の遺韻を傳へたものであるのを、誰も知つてゐるであらう。

私のやうな史學を専攻としない者にでも、是等のことが氣附かれてゐる。若し正當な歴史家が出て來るならば、彼は彼の「朝鮮美術史」に於いて、一つの驚愕を世界に寄與する事が出来るであらう。

(柳宗悅——朝鮮とその藝術)

柳宗悅
文學者。東洋大學教授。東京の人。明治二十二年三月生る。

一四 平安人の趣味

奈良期の人の線は太い。さうして多分に直線的傾向を帯びてゐる。平安期の人の線は細い。さうして多分に曲線的傾向に富んでゐる。奈良人は力で押し切らうとする。平安人は技でかはさうとする。奈良人は重厚である。平安人は輕快である。

奈良期の文化は、大和民族の昔から持ち合はせた思想生活の間に、直譯の大陸的文化がまだ生ま生ましい形で不消化のままに横たはつてゐる。然しその旺盛な進取の氣象はそれらの醜さをも顧みる違がなかつた。これが平安期に入ると、この兩者がよい鹽梅に融合され調和されて、渾然たる玉のやうな美しい文化を形成した。蓋し、奈良期までは建設時代であり、平安期は守成時代である。守成時代は、何時の世でも見るやうに太平無事の時代である。折も折

大陸との交渉は漸く疎遠になつて、外界からの刺戟を受けることもなくなり、ひたすら現境に満足して濃やかな春の眠を貪つた。かうした状況のもとに生まれはぐくまれた文化がどんな傾向のものであり、随つてその時代人がもつた趣味がどんなものであるかは、ほぼ想像に難くあるまい。

歌舞音楽は太平を粉飾する道具立であり、文藝はそれを謳歌する鳴物である。平安人がこれらに對して絶大な趣味をもつてゐたことは、あまりに世に多く知れ渡つてゐる。ここでは只二三の事項についてのみ語らう。

平安人は奈良人の如く自然に對しての憧憬を怠らなかつた。しかもその觀察と思索との程度が頗る綿密に微細に涉つてきた。花を愛好する情には大した變りはないが、おなじ月にしても、その清光を愛賞し、古を懷ひ故人をしのぶなどの紋切型以外に、或は、只今

只今ゆくへなく
云云
更級日記に見
ゆ。

紅紙に書いた手紙の文字云云
枕草子に見ゆ。

ゆくへなく飛び失せなばいかかと思ふべき」と感傷的空想に馳せたり、或は紅紙に書いた手紙の文字を透かして讀むのが面白いと、特殊の境地にその好奇の心を満足させたりした。ことに残月を愛好することが盛になり、在明の月は彼等が日常の口頭語といつてもよい程であつた。

雪に述つけて云云
拾遺集、その他にも見ゆ。
雪山は云云
村上御記、枕草子に見ゆ。
雪まろばし
源氏物語朝顔の巻、その他にも見ゆ。

雪は從來寒い苦しい厭はしい、わるい半面ばかりが強調されて居るやうだつたが、この期に入つては白樂天の雪月花時の句がその因を成したもののか、的面にこれを愛賞する記事が非常に多くなり、寒月の照り映えた雪の光は身にしみて面白いことの頂上と思はれ、雪に述つけての音づれば風流行爲の窮竟と見られた。雪山は盆山からはじめて、遂には大袈裟な假山を作るまでに發展し、雪まろばしと伴つて上流人士の冬季の遊戯であつた。
平安人の藝術は高雅優美纖麗で、黄金の線のふるへを見る如き

感じに打たれる。繪畫や彫刻は姑くおくも、性格の發露の殊に著しい書筆、中にも草假名に至つては、ありありと平安人特有の氣分を覺知することが出来る。

草假名は漢字の草書くづしから平安人の好尚によつて變形を遂げ、殆ど新規に發生したかの觀を呈したものである。もう疾くに實用の程度を脱して立派な藝術として認識される域にまで達してゐた。その優婉な曲線の交錯は、唐草模様が意識的に一つ一つ靈動し亂舞するかと思はれる。平安人の草假名に對する趣味は絶對であつた。これを女手と稱した。源氏物語梅が枝の巻に、

例の寢殿に（源氏物語）離れおはしまして書き給ふ（女手）花ざかり過ぎて、淺緑なる空うららかなるに、古き事どもなど思ひすまし給ひて、御心のゆくかぎり、草の（草假名）もただのも、女手をいみじう書きつくし給ふ。御前に人しげからず、女房二三人ばかり墨など磨らせ給

例の寢殿に云云
物語の主人公なる光源氏が、自邸にて草假名の手本を書く所。

兵部卿の宮
光源氏の異母弟
にして登兵部卿
とも稱せらる。

徒然に云云
光源氏の言葉。

ひて、故ある古き集の歌など、いかにぞやなど選り出で給ふに、口惜しからぬかぎりさぶらふ御簾あげわたして脇息のうへに草子うちおき、端近くうち亂れて、筆のしりくはへて思ひ廻らし給へるさま、飽く世なくめでたし、白き赤きなど掲焉なる枚は、筆取りなほし用意し給へる様さへ、見知らぬ人はげにめでぬべき御有様なり。兵部卿の宮わたり給ふと聞ゆれば、驚きて御直衣奉り、御褥まゐり添へさせ給ひて、やがて待ち取り、入れ奉り給ふ。この宮もいと清げにて、御階、様よく歩みのぼり給ふほど、内にも人々のぞきて見奉る。うち畏まりて、かたみにうるはしだち給へるも、いと清らなり。徒然に籠り侍るも、苦しきまで思ふ給へらるる頃ののどけきに、折よく渡らせ給へると悦びきこえ給ふ。かの御草子持たせて渡り給へるなりけり。やがて御覽すれば、勝れてしもあらぬ御手を、只片かどに、いとい

かうまでは云云
光源氏の言葉。
かかる御中に云
登兵部卿の言
葉。

たう筆すみたる氣色ありて、書きなし給へり。歌も殊更めき、そばみたる古言どもを選りて、只三くだりばかりに、文字ずくなに好ましくぞ書き給へる。大臣御覽じ驚きぬ、かうまでは思ひ給へずこそありつれ。更に筆投げ棄つべしやと妬がり給ふ。かかる御中に面無くくだす筆のほど、さりともとなむ思ふ給ふるなど、たはぶれ給ふ。書き給へる草子どもも隠し給ふべきならねば、取り出で給ひてかたみに御覽ず。唐の紙のいとすくみたるに、草に書き給へる、勝れてめでたしと見給ふに、高麗の紙の、膚こまかになごう懐かしきが、色などは花やかならでなまめきたるに、おほどかなる女手のうるはしう、心とどめて書き給へる、譬ふべき方なし。見給ふ人の涙さへ、水莖に流れ添ふ心地して、飽く世あるまじきに、又ここの紙屋の色紙の色あひ花やかなるに、亂れたる草の歌を筆にまかせて亂れかき給へる

様、見所限なし。しどろもどろに愛敬づき見まほしければ、更に
残どもに目も見やり給はず。

例の小説的假構記事ではあるが、平安人が草假名に對する眞摯な
態度が如實に描き出され、そして爛熟し切つた趣味の流の横溢は、
何人をも無條件に巻き込んでしまふであらう。

又聞香の趣味にしても、正式の香道の盛だつたことは、香合はせ
の遊技の行はれたことでもわかるが、平安人の或者は雨中に山吹
の香をなつかしがり、冬時分に飾菖蒲の枯れ残つてゐるのを引き
折ると端午の時の香がすると喜び、車に拉がれた蓬が輪のあふり
にふと薰つたと嬉しがつた。かういふ尖鋭な官能のはたらきに
立ち入るほど、平安人の趣味は深く細かく多種多様に分裂してい
つたものである。(金子元臣)

雨中に山吹の香
を云云
古今集に見ゆ。
冬時分に飾菖蒲
の云云
枕草子に見ゆ。
車に拉がれた蓬
が云云
枕草子に見ゆ。

一五 物のあはれ

「物のあはれ」といふ言葉は、わが國では昔からいひ舊された言葉
ではあるが、この言葉には、文學の人生にもたらす効果、竝に吾吾の
文學に對する態度といふことについての重大な意味が含まれて
ゐる。だから、この言葉の意味を詳しく考へ直すといふことも、あな
がち無用のわざではあるまい。

「物のあはれ」といふ言葉は、用ゐられる場合によつても、用ゐる人
によつても異なつてゐる。例へば、兼好法師の徒然草の中にも、あだ
し野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住み果つるな
らひならば、いかに物のあはれもなからむ」といつてあるが、この有
名な文句は、人間に死といふものがなければ、世の中に悲しい事は
ないであらうといつたので、ここでは只悲しみとか哀傷とかいふ

兼好法師
ト部兼顯の子。
後剃髮して洛外
吉田に住す。文
に巧み和歌に秀
づ。正平五年四
月寂す。(一九四
二年—二〇一〇
年)

やうな意味である。しかし同じ兼好法師が同じ書物の中で、人間はあらゆる動物の中で一番長生をするものであるに拘らず、いつまでもいつまでも長生したいといふ慾心が旺だといふ事を書いて、「ひたすら世を貪る心のみ深く、物のあはれも知らずなりゆくなむ淺ましき」といつてゐる場合の「物のあはれ」は、前とは趣が異なつて、單に悲しみといふこと以上に、複雑なものになつてゐることがわかる。

「物のあはれ」の文學的意義について、最も透徹した意見を示したのは本居宣長である。彼はその源氏物語玉の小櫛の中に、このことを論じてゐるが、まづ「あはれ」といふ言葉の意義から始めて、次のやうにいつてゐる。

「あはれ」といふは、もと見るもの、聞くもの、觸るるごとに心の感じて出す歎息の聲にて、今の俗言にも「あ」といひ、「はれ」といふ

本居宣長
國學者。賀茂真淵の門人。伊勢松阪の人。紀州侯に仕ふ。享和元年九月歿す。荷田春滿、賀茂真淵、平田篤胤と共に國學の四大人と稱せらる。(二三九〇年—二四六一年)

これなり。譬へば月花を見て感じて、ああ見事なる花ぢや、はれよい月かななどといふ。あはれといふはあのあ、あとはれとの重なりたるものにて、漢文に嗚呼などある文字をあ、あ、と讀む、これなり。古言にあな、又あやなどいへるあも同じ。又は、やともは、ともいへるはも、かのはれのはと同じ。又後の世にあつばれといふも、あ、あはれと感ずる詞にて、同じことなり。

即ち、宣長の説明でもわかる通り、「あはれ」といふことは、よきにつけ悪しきにつけ、物に感ずることをいふので、「物」はただ添へていふこと、例へばただ言ふといつてよいところを「物いふ」といひ、ただかたるといつてよいところを「物がたる」といひ、その他「物まうで」「物見」「物いみ」などいふたぐひである。「物のあはれを知る」といふことは、宣長の言葉を借りていふと、「何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきところを知りて感ずる」をいふのである。即ち感受性を活かせる

るといふ意味である。宣長は續けていふ、必ず感ずべきことにありても、心動かず感ずることなきを物のあはれ知らずといひ、心なき人とはいふなり。物のわきまへ心ある人は、感ずべき事にはおのづから感ぜずではえあらぬ業なるに、さもあらぬは何とも思ひ分くかたなくて、必ず感ずべき心を知らねばぞかしといつてゐる。そして文學を研究するのは、この「物のあはれ」を知るのであるといつてゐるのである。

蓋し、この「物のあはれ」を知らしめるといふことは、事實また文學の興へる大きな力であるといはなくてはならない。紀貫之の有名な古今集の序にも、

「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり、

とあるが、これ即ち歌が「物のあはれ」を感ぜしめるからであるとい

へる。

本居宣長は、同じ書物の中で、小説の意義について次のやうにいつてゐるが、これは移して以て文學全體の意義を説いたものだといふことも出来る。即ち曰はく、

「物語は世の中にありとある、よきこと、あしきこと、珍しきこと、をかしきこと、面白きこと、あはれなることなどの様様を書きあらはして、徒然なる程のもてあそびにし、又は心のむすばれて物思はしき折などの慰めにもし、世の中のあるやうをも心得て、物のあはれをも知るものなり、

と、實にいみじくもいひ得てゐるではないか。即ち物のあはれを知るといふことは、世の中の様様の人間關係を、單に表面的ではなく、底の底まで立ち入つて、深くしみじみと味はせることをいふのである。今日の新しい言葉でいふと、全圓的な人生味とか、全體として

の人生の味などといふ意味である。そしてかういふ意味を味はせることこそ、實に文學の人生にもたらす最も大きな効果であるといへる。

だから文學を本當に味つてゐる人、即ち本當に物のあはれを感じてゐる人と、さうでない人とは、その人の内生活は大變にちがつてゐる。文學を味つてゐる人は、全體としての人生を見るから、同情心が非常にゆたかである。だから、例へばここに極悪無道の人間があつたとしても、それをすぐさま極悪無道な人間としては取り扱はない。どうして一般の人と同じ人間でありながら、彼のみがさういふ極悪無道な人間になつたかといふ徑路をまづ理解して、一概には彼を憎む氣持にはなれない。事實すぐれた文學は、その作者もさういふ同情心の深い人であるが、その作品にもさういふ同情心が溢れてゐる。たとへば、わが元祿文學の代表者である近松門左

Arnold Bennett	アーノルド、ベ ンネット	Iago	オセロー中の 人物の名。	Othello	共に沙翁の戯 曲名で、その 曲の主人公の 名。	Macbeth	マクベス	Hamlet	ハムレット
----------------	-----------------	------	-----------------	---------	----------------------------------	---------	------	--------	-------

衛門の「女殺油地獄」の主人公の油屋與兵衛といふのは、彼自らも後に悔恨して「思へば廿年來の不幸無法の悪業が、魔王となつて與兵衛が一心の眼をくらまし」といつてゐる通りの極悪人ではあるが、この作を本當によく讀んだ人には、どうしてもこの與兵衛を本當に憎み得ない。境遇と性格とから自然にさうならざるを得なくなつたといふやうに感じて、彼を憎む前に、まづ同情する。大沙翁の作なども同じことである。學者は沙翁のことを「萬人の心の人」といつてゐるが、沙翁は、實はハムレットにも、マクベスにも、オセローにも、更にイアゴにも、同じやうな同情の心を持つて對してゐるのである。従つて沙翁の作を讀んでは、その作や人物が假にイアゴのやうな悪人であつても、吾吾はそれを憎む氣持にはなれない。かやうに見て來ると、物のあはれを文學に依つて知ることとは、同時に人生そのものを知ることだともいへる。アーノルド、ベンネッ

トが、その近著文學趣味構成法の中に、「文學の理解ある鑑賞といふことは、この世界の理解ある鑑賞といふことを意味する」といつたのと同じ意味だともいへる。文學の社會性や道德性は、すべてこの理解ある鑑賞といふことを基礎として、始めてその意義を展開して來る。

私はこの意味で「物のあはれ」を知ること、まづ文學鑑賞の基礎を置く。(本間久雄—現代隨筆大觀)

本間久雄
文學者。山形縣
の人。早稻田大
學教授。

殺風景

- 花間、喝道、看花、涙下、苔上、鋪席、斫却、垂楊、花下、曝裊、游春、重載、
- 石筍、繫馬、月下、把火、果園、種菜、背山、起樓、花架、下養、鷄鳴、對花、
- 啜茶、煮鶴、燒琴、(雜纂)
- 富貴相
- 駿馬、嘶、蠟燭、淚、栗子、皮、荔枝、殼、落花、飛、鶯燕、語、讀書、聲、遺、
- 下花、銅、高樓、上吹、笛、擣藥、碾茶、聲、(同)

一六 清文私評

一、春は曙

春は曙。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねどころへ往くとて、三つ、四つ、二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風のおと、蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいとしろく、又さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も白き灰がちになりぬる



はわろし。

我我日本人ぐらゐ、自然といふものに對しての深い憧憬をもつてゐる民族は、他に恐らくあるまい。我我の祖先の生活は自然に支配され、或は時に盲從してゐる。それ故、我我の有する文學、美術には、自然を對象としてその美を發揮することを努めたものが頗る多い。よし對象とせぬまでも、自然を背景とせぬものは殆どない。だから、わが文學、美術から自然を切り離して見ることは到底不可能なことである。かうした國民性をもつた我我の祖先が、動もすれば四季の風物をいひ、花鳥風月を歌つたのは、蓋し當然である。

四季の風物に對しての好悪は、甚だ複雑な聯感が伴ふものであるが、直覺的には、觸感の刺戟に本づくことがその大部分であるから、春秋二季は殊に快的な時節と認められ、つひにこの二季

空穂物語
二十卷。源氏物語以前に出た小説。作者詳ならず。

の優劣は人人の口頭語となり、詞人がその才藻をきそふ好題目となり、或は春に袒を入れたり、或は秋に心を寄せたりして、彫心鏤骨、詩壇の一佳典を作るやうになつた。けれど、一派の詞人は、四季のおの特色があり好處があることを認めて、頗る公平な見地からその推稱を怠らなかつた。すなはち平等に四季の景趣を敘したのものには、この草子以前に空穂物語があり、同時に源氏物語があり、後世には徒然草がある。中にも傑出したのをこの文とする。蓋し清女一流の敏警な觀察と、引き締つた齒ぎれのよい筆致とは、とても他の眞似の出來ない妙處で、實にわが國文中の異彩である。

やはらかい輪郭を作つた東山の峯に、ほのぼのと別れてゆく横雲の空は、京うまれの清女が幼少から見馴れて、印象ふかく感じた景色であらう。また雨に對する厭惡の念が、今のわれわれの

想像以上に強かつた當時において、雨などの降るさへをかし」と道破したのは、よく時代を超越して自然の趣味を解し得たものである。「三つ四つ二つ」の辭様の參差は、鳥のまばらに飛んでゆく状を形容し得ておもしろい。ちひさく見ゆるは雁が山飛び越えて去來する光景で、京都の地勢上常にありがちなことである。稀には低く飛ぶこともあらうが、下文にも「雁の聲は遠く聞えたるをかし」といつてゐるのを見ると、それは清女の嗜好に適はなかつたものだらう。否、恐らくは近い雁に詩味を感得するほどの機會と經



清少納言(國華所載)

小大君集
一卷。三條天皇
の女藏人小大君
の和歌を集めた
るもの。

大原
京都府愛宕郡。

験とをもたなかつたのだらうと推察される。火などいそぎおこすに寒氣をおそれた趣が現はれてゐる。炭もてわたるは彼方此方の火桶炭櫃に女官達が炭つぎまはる光景であらう。小大君集に、

殿上に炭もてくる男をおそく参りたりとて藏人のとらへて、髪に繩をゆひ付けて宥さざりしかば、女房方よりよみてやる。

おほはらや炭のかしらの繩ゆるせ

このめに涙うかぶといふなり。

これによると、當時の禁中御用の炭は、大原の炭竈からぢかに上納したものと見える。納入の時期がおくれたとて、その炭焼の長を折檻するのは甚しい亂暴のやうだが、まことに炭なしには片時も居られぬから仕方がない。天井はなし、大間ではあり、四方か

け拂ではあり、日あたりもとかく不十分な當時の殿舎では、寒さはさこそと想ひやられる。そこで火おこすも、炭もてわたるも、頗る有意味な譯となつて、つきづきしくもをかしくも、餘計に感ぜられるのである。

時刻を四季に配當して、その特色を紹介したこの企は、空前の新案である。さて春は曙、夏は夜、秋は夕ぐれ、冬は早朝の四綱目がまづ出來て、次にその細説を試みるに當つて、春夏秋は専ら紋景につとめ、冬には人事を配して内容に變化あらしめ、また春夏を輕輕に評し去つて、秋冬に力をそそぎ、また春夏秋は専らその好處をのみ擧げ、冬には、晝になりて——わろしと抑損の轉語を下したなど、筆法が變化に富んでまことに面白い。しかも文の様式が整然として、その結構から、布置から、一寸のたるみも無い。初學者の模範を取るには最も都合のよい文體の一つであらう。

殊に注意すべきは春の曙と秋の夕暮とである。この文が一度世に出てから、この二つは吟詠の好題目となつて、千載の今もなほ歌人の口の端に乗つてゐる。以てその觀察がただ奇警といふばかりでなく、極めて妥當であることが證明される。

二、過ぎにし方戀しきもの

枯れたる葵、ひひな遊の調度、二藍、えび染などのさいでの、おしへされて草子のなかにありけるを見つけたる。又折からあはれなりし人の文、雨などのふりて徒然なる日さがしいでたる。こぞのかはほり、月のあかき夜。

賀茂祭は平安京第一の物見だから、その神事の象徴たる二葉葵は、祭過ぎて、年月が経つても、床しい物に取り扱はれて、それに就いた風流的話説は殆ど枚擧に堪へない。當時の上流社會の雛遊は、今のお雛様のやうな飾附を常にやつてゐたらしい。源氏



賀茂祭
賀茂神社の祭。
四月の中の酉の
日に行ふ。葵祭
ともいふ。近衛
中將使に立ち、
諸官齋固し、威
儀極めて壯大な
りき。
二葉葵

齋宮女御集
一卷。村上天皇
の時の齋宮女御
の和歌を集めた
るもの。

物語に雛の家を犬きがこはしたので紫上が大騒ぎをした事があり、又齋宮女御集に、

ひひな遊に神のおもとに詣づる女云々。

おなじ雛社の前の川に紅葉のある所。

など見え、中中大業なものだつた随つて遺存する道具の眼に觸れるのも多く、小兒の昔が懐かしくもなる。流石は女の情である。裁切が草子の間にはさまるのは、女でなくては更に出會はぬ事件で、ふと見附け出して、衣裳を新調した折柄をしのぶ、その事その情、いづれも幽婉である。二藍、葡萄染は當時の人の好尚にかなつた色合であつた。それは紫を基礎色としたからである。人の文は徒然草にこれを潤色したのがある。兼好法師も同感と見えた。扇は折に觸れて新規に造るを興とした時代だから、古扇は昔をしのぶよすがとなるのである。月に往事を思ふことは、文獻上で

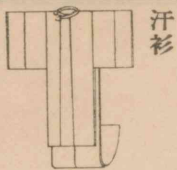
は支那文學の將來した思想のやうであるが、元來どの民族でも固有してゐる感情だらうと思ふ。

この文、名詞止の雙頭で起り、おなじ雙尾で結び、中間また長句の中止法で對句を作つて、齊整簡約な體裁である。しかも内容は極めて柔い、なつかしい情調が往來してゐる。

三、あてなるもの

薄色に白がさねの汗衫。かりのこ。けぶり氷のあまづらに入りて新しきかなまりに入りたる。すゐさうの數珠。藤の花。梅の花に雪のふりたる、いみじう美しきちこの覆盆子くひたる。

紅白淺紫の色彩に形相光澤の美が入りまじつて一篇玉のやうな詩である。作者の心のひかりが透き徹つて見える。汗衫や藤の花はその紫色が頗る品よく感ぜられる。殊に平安人士の嗜好には深くかなつた色相で、單に濃い薄いといへば紫色のことでは



汗衫

ある程に、一般的好尚となつてゐた。下文にも「紫は何も何もめでたし」といつてゐる。水晶の數珠、家鴨の卵の品のよいのは素よりのこと、金椀は銀で、梅はかならず紅梅でなくてはならぬ。さてこそ、氷も雪も調和が美しいのである。乳兒の覆盆子は紅梅の雪とおなじ配色の美であるが、「食ひたる」の一語に乳兒の愛らしげな動的の情致が動いて見える。

今日の氷の甘露をさすとは反對に、削氷が甘葛に入るとあるので、その氷の分量が少くつて貴かつたことが想像される。しかもこの甘葛が砂糖とはちがつてあまり感心した物でもないが大御酒參つて氷水召せば、その頃の「上流社會の大した奢であつた。」

四、香爐峯の雪

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火お

宮
一條天皇の皇后
藤原定子。當時
中宮。

香爐峯の雪
白氏文集に「遺
愛寺鐘、敬枕聽、
香爐峯雪撥簾
看」。

こして物語などして集まり侍ふに、宮、少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く巻き上げたれば、笑はせ給ふ。人人も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそ寄らざりつれ。人人、なほこの宮の人にはさるべきなめりといふ。

雪とさへいへば慄へながらもめでたがつた人達が、格子をおろして話し込んでゐたのは蓋し異例である。中宮の「香爐峯の雪」は、の提唱は、格子をあげさせたたく思し召しての御方便であつたらう。

香爐峯の句は菅公の名句、都府樓、纔看瓦色、觀音寺、只聽鐘聲、の藍本として著名であり、公任もその朗詠集中に收めたほどで、當時誰知らぬ者もない。撥簾看は中宮の豫期して居られた歸結だが、只それを女房達がどんな鹽梅に扱ふか、どんな形式で發表す

基俊
歌人。藤原氏、
俊家の子。源俊
頼と名を齊しう
す。但才を恃み
て倨傲なるを以
て顯達せず。

悦目抄
一卷。假名遣ひ、
その他歌歌上の
注意を記したる
もの。

るかに興味をもたれたのである。女房達の中には折角思ひ寄つても、氣の利いた御答が出来ないので躊躇した者もあらうが、清女の如く何もいはず、すつと起つて簾を捲き上げる態度に出ることは知らなかつた。これは單なる聯想だけで終るのではなく、更に體現して見せたのである。しかも咄嗟の仕事だけに、いよいよその敏慧さに驚かされる。清女が再三名聲を博したのは文辭上、口舌上の才鋒であつたが、これは更に一步を進めた仕打である。清女の手柄話は數ある中に、こればかり後世まで特に傳稱された所以もそこにある。

然るべきなめり」が、清女の才女なことを直接に保證すると同時に、「この宮の」が中宮の才學に勝れた御方であることを間接に保證してゐる。基俊の悦目抄に、「香爐峯の雪は」を一條院の敕言とあるのは誤解である。（金子元臣——枕草子評釋）

一七 斷光錄

一、苦痛の祕義

苦痛の刹那、人は往往黙して聖者となる。苦痛の前には一切の煩惱薄きこと霧の如く、眼中の山河大地も、幻の如くに漂ひ去らんとす。一念即一切、一切即一念は正しくこの境の光景なり。この時吾人は往往一種清涼の感を覺ゆることあり。

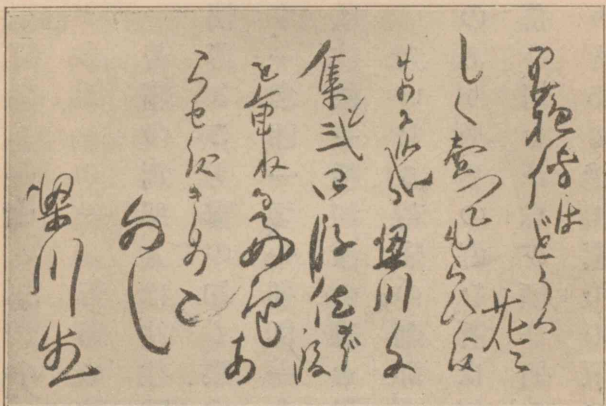
大いなる苦痛の刹那、人に誇るべき何ものありや、恃むべき何ものありや、その好む所は何ぞ、その願ふ所は何ぞ、彼はた何をか戀ひ慕ひ、何をか思ひ煩ひ、何をか恐れ惑ひ、何をか蹴き惱むぞ、およそありとある迷執薰染の源なる我等が心の小壺の古黴は、一念清淨の水に迹なく洗ひ去られて、中に燃ゆるは唯沈痛嚴肅なる苦痛の骸のみ。苦痛の骸は畏るべし。しかもそは往往にして能く百煩惱の束

縛を解く。苦痛三昧はしばしば清涼の三昧なり。

苦痛は必しも恐れ詛ふべきものにあらず。苦痛は時に吾人を神

に詣でしむる試煉の聖殿たり。嗚呼人生の行路に慘痛の涙あり。しかも吾人はこの涙に煉り淨められて、しばしば赤子天真の心に立ち還るを得。かくの如きは實にこの不可思議なる神の世界の一祕義なり。これ浮泛語にあらず。われはわが病床に於いて曾てしばしばこの祕義を味へり。

苦痛は人をして至誠ならしむ。眞面目ならしむ。我執我慢を脱せしむ。而して又時に神祕の靈力を直覺する大勇の道士たらしむ。語に曰はく、



綱 島 梁 川 筆

耶蘇傳はどう
か花々しく賣
つてもらひ度
ものに候哉梁
川文集も三四
版位まで版を
重れる好望あ
らせ度きもの
也勿々
梁川生

陳蔡の野に云

陳蔡の大夫謀りて孔子を野に圍みて糧を絶つ。從者病みて能く起つものなし。孔子講誦絃歌して衰へず。弟子の愠色あるを知り、子路を召して「詩云、匪兕匪虎、率彼曠野。吾道非耶、吾何爲於此」といへること史記孔子世家に出づ。我が神云。新約全書馬太傳に出づ。

「苦しい時の神頼み」と、人疾痛慘憺に會して、いまだ曾て天を呼ばずんばあらず」と古人も道ひぬ。これむしろ人情の至極なり。而して人情至極の煥發、これ實に神の最も近く在します宮居にあらずや。孔子の極めて實際的氣質なるだになほその陳蔡の野に苦しむや、天てふ超自然力に我の存在を結びて、以て自ら彊うし自ら勵ましたり。苦痛に祕義あり、我が神、我が神、何ぞ我を捨て給ふや」の基督の一語、嗚呼世にこれほど深奥無量の苦痛の祕義あるべしや。この一語、只只我等が一代の血涙を灑ぎ盡して味ふべきなり。語る能はず、説く能はず。

二、自大自矜の一念を慎めよ

吾等をして自大自矜の一念を慎ましめよ。吾等にして若し絶對無上の眞理を攫めりとも、吾等は竟にこれ神にあらず、如來にあらず。基督だに曾て自己を神なりとは宣せざりしにあらずや。吾等は

竟に神にあらず。吾等は神の子なり、神の大愛に連る一分身なり、一箇識なり。神人合一の刹那の境に於いて、吾等は全く神とはならず。ただ一息間なき靈交の自覺に入れるのみ。我は神の濫かなる懷に抱かれながら、依然としてなほ我たり。嗚呼ここに吾等が永へに居るべき眞地位はあるなり。而して權威と光榮と、亦實にここにあり。吾等をして漫に自悟自覺の一念に思ひあがらしむる勿れ。吾等悟れりといへどもなほ神にあらず。否悟そのことが神よりの恩寵なり。我は、世の絶對の眞理を悟れりと稱する自覺者の態度に、歸依敬虔の一味なきをいと惜しとするものなり。

三、自然

春は歌ひ、夏は働き、秋は考へ、冬は徹す。徹して歌ひ、歌うて而して働き、働きて而して考へ、考へて而して徹す。大河の水と流れ、梵音の響と續きて一氣貫穿、自彊しばらくも息まざるもの、これ「自然」てふ

大いなる靈魂の呼吸にあらずや。

歌ふや充實す、春海洋洋たり。働くや充實す、夏雲滂滂たり。考ふるや充實す、秋の野に千里空明の觀念平かに。徹するや充實す、冬の空に涅槃實相の姿圓かなり。

自然の運行は、歩歩節節悉く充實して、一瞬やがて三世を渦巻きめぐる。古池に蛙飛び込む水の音は、聲聲やがて久遠に響きつらなる轉法輪にあらずや。鳶飛び魚躍り、風吹き水流る、自然の何物かこれ一氣の充實ならざる。充實は即ち誠なり。誠は即ち天地の大悅なり。

神を信ずるものは人を信じ、人を信ずるものは自然を信ず。かくて我等は熱き涙を頑石の面に濺ぎ、優しき念を荒海の胸に抱くを得るなり。

(網島梁川——回光錄)

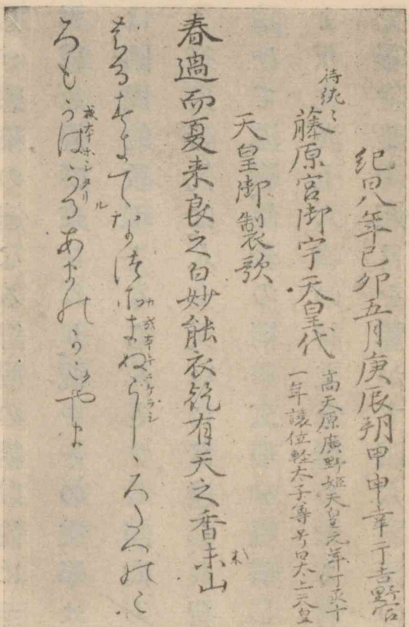
一八 萬葉集概観

奈良時代、我等はこの語を聞く毎に、必ず國歌の黄金時代を聯想することを禁ずる能はず。抑もわが國に於いて、詩歌は遠く神代の昔より行はれたり。されど、上古にありては、未だ文字の發明なかりければ、後世の如く目に見すべきものならで、只管耳に訴へしものなれば、自然の諧調につれて、長くも短くも謠ひなし、語數に劃然たる制限なかりき。これを比較的幼稚なる歌謠時代の特徴とす。爾來、幾多の歲月を經、星霜を重ねるままに、この不規則なる字句の中に、自然に世人の好尚一致して、遂に五七調、或は七五調とその旋律が整理せられ、ここに始めて各種の體製を生じ、詩形の定格を見るに至れり。その重なるものは、曰はく短歌、曰はく長歌、曰はく旋頭歌、曰はく片歌、その他、異體畸

文選
六十卷。周秦以來梁に至る詩文を類聚せるもの。梁の昭明太子の編。

形のもの、を數へば、猶數種に上らん。應神の朝に漢學渡來し、繼體の朝に、佛教傳來したれど、推古朝の頃までは、未だその著き影響を歌謠の上に現はさざりき。浸潤の久しき、感染の速なる、舒明の朝以後に至り、國歌は漸く變調を來たし、異彩を帶び來たれり。況や、その文學は國民的文學となり、その教理は國民的教理とならんとする傾向ありし奈良時代に於いてをや。奈良時代は、人文大いに發達し、人智の程度、頗る前代に超越せり。隨ひて漢學、佛教の精華玄理を咀嚼し、吸收するに適したりき。これより先、漢土六朝の詩文を輯めたる有名なる文選の舶載を見、その光彩陸離、絢爛目を驚かす四六駢儷の文體句法の、直に邦人の歸依、渴仰するところとなりしは、當時の述作なる宣命に、祝詞に、隨處に、その片甲殘鱗を認むるを得べし。而して、國歌、殊にその長歌の組織が、飛鳥、藤原の二時代に於いて發達せしは、祝詞、宣命に負ふ所尠か

らざるが如し。さては、長歌の組織は、直接間接に漢文學の影響せるものといふを得べし。豈啻にその組織のみならんや。すべての國歌の内容に於いて、漢學、佛教の影響、歴歴たるものあり。是等の例證を



待統、
藤原宮御宇天皇代
高天原廣野天皇元年丁未十
一年該位皇太子尊号曰大元皇
天皇御製歌

元 曆 萬 葉

が國固有の思想は、依然としてその大部分を包含せり。敬神忠君の念、愛國の想に富み、家を重んじ、名を重んじ、情に篤く、涙にもろく、しかも快活なる、滑脱なる奈良朝人士の面目は躍如たり。要するに、質

列舉せんことは、いとたやすき業なれど、その煩に堪へざるをいかにせん。

但、影響は固より影響なり。決してその本來に

朴なる時代にありて、單純なる實感を吐露せるに過ぎざりしもの。この時代には、一大飛躍をなして、その構想は複雑となり、豊富となり、その修辭は巧緻となり、雅馴となり、詩形整頓し、格調完備せり。この大業を成就し、鴻基を啓きて、歌壇の帝王となりしものは、實にわが柿本人麿なり。

人麿の歌や、整雅壯偉、熱情内に磅礴して、句句涙字、字血、眞に古今歌匠の一大宗たり。山部赤人、平淡悠遠なる體調を爲して、別に一旗幟を樹つ。後世、山柿と並べ稱すること偶然にあらず。山上憶良、よく漢學、佛教の外國的典故思想を融冶して、人道を詠じ、事相を敘せり。格調やや卑俗なりと雖も、またわが邦の白樂天たるを失はず。大伴旅人、豪放なれども、固より上三家に武を接するに足らず。その子家持は、輕易に失して、卑靡振はず、漸く平安朝の歌風の素を成せり。然れども、歌人としては、遙に父に優り、よく委曲をつくせり。賀茂眞淵

柿本人麿

持統、文武の二朝に仕ふ。後官に石見に卒すと

いふ。

山部赤人

聖武、天皇に仕ふ。柿本人麿と名を齊しうす。

山上憶良

大寶中遣唐小録となり入唐す。伯耆守、筑前守に歴任す。天平五年六月卒す。(一三二〇年—一三九三年)

大伴旅人

安廬の子。養老二年、卑人を征して功あり。天平二年、大納言となり、同三年七月薨す。(一三二五年—一三九一年)

家持

旅人の子。延暦中中納言、征夷大將軍となり蝦夷を伐つ。延暦四年八月薨す。(一四四五年)

賀茂眞淵

江戸の國學者。通稱岡部衛士。縣居と號す。明和六年十月歿す。(二三五七年)

葛城眞津彦

武内宿禰の子。應神天皇の朝命を奉じて新羅を伐つ。生死年代未詳。

はその著萬葉考のはじめに論じて曰はく、
柿本朝臣人麿は、古ならず後ならず一人の姿にして、荒魂和魂
いたらぬ限なむなき。その長歌勢は雲風にのりてみ空行く龍
の如く、言は大海の原に八百潮のわくが如し、短歌の調は、葛城
の襲津彦眞弓を引き鳴らさむなせり。深き悲しみをいふ時は、
千早ぶる者をも歎かしむべし。山上臣憶良は、詞ふつつかにし
て、心うつくし。久米の伴の雄雄しき姿して、たつつ舞せらむお
もほゆ。短歌の中に、ただ言にいへるはいふべくもなし。山部宿
禰赤人は、人麿とうらうへなり。長歌は、心も言も、ただに清らを
つくせり。短歌こそ、これも一人の姿なれ。巧みをなさず、あるが
まにまにいひたるが、妙なる歌となりしは、本の心の高きが至
なり。例へば、檳榔の車して大路をわたる主の、あから目もせぬ
が如し。大伴宿禰旅人のまへつ君の短歌は、雄雄しくてかなし。

酒を詠めるに、皇御國の心をいへるは貴し。こは調を捨てて心
をぞ取るべき。長きは知らず。それが繼なる家持のぬしは、事を
よく記して句なし。例へば、いでましの大御伴のつらを、めでた
く記せる文の如し。短歌はいと多かれど、あらびて、うらぐはし
きは稀になむある。これよりさきに、三方沙彌、久米禪師が古き
姿のうるはしき、又長忌寸意寸麿、春日藏首老が心しらひ、その
外にも、これかれあれど、ここに悉さず。田邊史福麿、笠朝臣金村、
高橋連蟲萬呂などは、徒に古をいひ模ししものなれば、強きが
如くにして下弱し。女にては、額田姫王は古のみやび人なり。春
秋の争をことわり給へりしなむ、女心のをかしき。大伯皇女の
御歌は、事にふれて上にいひつ。石川郎女がなよびたる姿、譽謝
姫王のよろしき調、大伴阪上郎女の歌は、氏の手振のしるく、事
にも當りぬべきさまなり。また、歌主知られぬにこそ、尙多けれ。

藤原の宮造にたてる民が歌は、おぼろげにあらず。同じ御井の歌の、古言を和しいひてあやあるは、その代の黑人、人麿の外にすぐれにたり。すべて短歌にひでたるさはなれど、擧ぐるにたへむやは。

斤量手にあり、大體に於いてその權衡を誤らざるが如し。この時代の歌調は、後世にいはゆる萬葉風にして、古今集以後の歌風とは、全く別裁に屬す。而して一概に萬葉風とこそいへ、なほこれを仔細に論ずれば、その七十年間に三時期を分つを得べし。即ち天武、持統、文武の三朝、人麿、赤人等の馳騁せし約二十年間を第一期とし、元明、元正の二朝、山上憶良、大伴旅人等の牛耳を執りし約二十年間を第二期とし、聖武、孝謙の朝、大伴家持、大伴阪上郎女等の雁行せし約三十年間を第三期とす。又第一期は振興時代、隆盛時代なり、第二期は守成時代なり、第三期は衰頹時代なり。

又、その體製を分ちて論ずれば、旋頭歌は、殆ど記紀時代の餘波たる觀ありて、分量に於いて素より少く、價値に於いても亦絶大の物ならず。長歌はこの時代の特産物として、後代の稱揚するところとなりたれど、公平にいへば、その三四の傑作を除きては、大方結構布置に變化少く、想はなほ幼稚に、單純に、貧少にして、未だ拍案の妙あらず。只、時に眞情流露、氣を以て勝るの概あるを多とするのみ。これを後世の形式だも整はざる拙劣なる長歌に比すれば、固より霄壤の差ありといふべし。ひとり、短歌は殆ど空前絶後の偉觀を呈し、神品逸品の傑作佳什、相踵いで、一唱三歎の風味永し。

萬葉集は實にこれ等奈良時代の製作を中心として採録したる一大歌集なり。もと精選の集にあらざるが爲、却つて多角多様なる光彩を煥發し、歴史に於ける古事記と共に、實にわが國寶的述作として尊重せらる。(金子元臣——萬葉集選)

一九 御民われ

海犬養岡磨

みぢみわれいささしるきりり大地の

栄ゆるもふあつらへおとく

橘 諸兄

る海雲のしる髪まのてはおほおふ

つらまつねざさくともいりり

基檀越妻

神風の伊勢の浪萩ふりあせ

海犬養岡磨
傳詳ならず。

橘諸兄

美努王の子。元
明天皇以下四朝
に歷仕し左大臣
正一位に至る。
世に井手左大臣
と稱す。天平寶
字元年正月薨
す。(一三四四年
一四一七年)
基檀越妻
傳詳ならず。

いづれもまもむまはまのた

大伴 柁人

いづれもまもむまはまのた

虫にまにもまはまはなりぬき

大伴 家持

まさしるもまもむまはまのた

まさしるもまもむまはまのた

作者未詳

まさしるもまもむまはまのた

まさしるもまもむまはまのた

子等ぞ思ふ

山上 信長

瓜合ぬははははゆ栗合ぬまはまはぬがわらうり
ありもはごまたうひもはくつうて安後なまぬ

反歌

白のねもはねもよとにせむにまはらるる
しつるやも

吉野宮にすしもせる時である

柿本人麿

安見くわう天君神たがう神とびそと吉野川にぎつ
らぬに言敷き高知あて下り立ち國をすれきた

吉野川
吉野山の麓を流
れ、紀伊に入る。

なはる青垣山神のまつは酒とまはは花を
もち林とば紅葉かやせり遊割川の神も大倉宮に仕



(筆實信) 呂 麻 人 本 柿

はまつると上つ敷小務りそと下つ敷小細き後
ま山にしよりて仕ふる君が臣代りも

反歌

山川よりそつふる神なきもまうらひのり
船出せまうらひ

不盡山を望みては 山部赤人

天地の別は時ゆるみさびてまらまら駿河なる
も書の高嶺を天の原よりけなれは後る影も
かろひ照る月の光もみまらまらまらゆるり
時どき雪のふりてはまらまらまらまらまら

反歌

甲子の浦ゆおらげてみれば真白はまらまらまら
まらまらまらまら

田子の浦
静岡縣庵原町吹
上の邊の舊名。

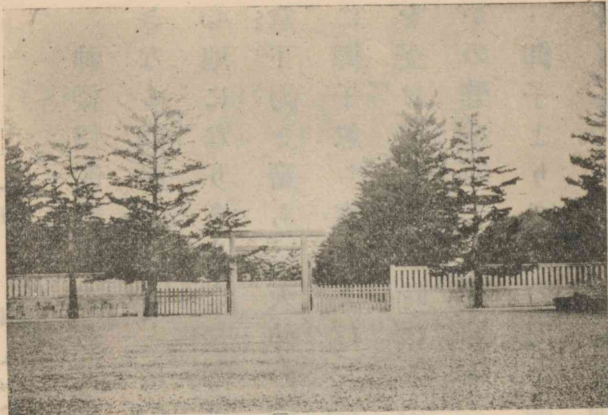
熊野村
和歌山縣牟婁郡の
古稱。

二〇 神武天皇の御東征

神倭伊波禮毘古命其處より廻りて熊野村にいでませる時に、大
きな熊出で入るとほのかに見えて即ち失せぬ。ここに命俄に醉
心地になりまし、また御軍も皆酔ひ臥したりき。この時に熊野の高
倉下刀を齎ちて、天神の御子の臥し給へる處にまゐりきて獻る時
に、御子忽ち寤めまして、長寢しつるかもと詔り給ひき。乃ちその刀
を受け取り給ふ時に、その熊野山の荒ぶる神自ら皆切り仆されて、
かの酔ひ臥したる御軍ことごとく寤めたりき。

御子よりてその刀を獲つる故を問ひ給へば、高倉下みこたへ申
さく、おのれ夢に天照大神、建御雷神を召して詔りたまはく、葦原中
國はいたくさやぎてありけり。我が御子達惱みますらし。かの葦原
中國は専ら汝が言向けつる國なれば、汝降りてをさめよとのり給

ひき、建御雷神みこたへ申して、「おのれ降らずとも、専らかなの國平けし刀有れば降してむ。高倉下が倉の棟を穿ちて、そこより墮し入れ



畝 傍 御 殿

む」と申し給ひき。さて建御雷神おのれに、「汝が倉の棟を穿ちて、この刀を墮し入れむ。汝取り持ちて、天神の御子に獻れ」と教へ給ひき。乃ち夢の教のままに、つとめておのが倉を見たるに信に刀ありき。そは獻るこの刀にこそ」とまをしき。
ここに大神亦高木神をして御子の命に、「ここより奥つ方にな入りましそ。荒ぶる神いと多かり。今天より八咫鳥をおこせむ。その道引きのままに後よりいでますべし」と諭し申し

宇陀
奈良縣宇陀郡宇
賀志村。

給ひき。よりてそのみさとしのままに、その八咫鳥の後よりいでましき。

ここに宇陀に、兄宇迦斯、弟宇迦斯の二人ありけり。先づ八咫鳥を遣して、二人に、「今天神の御子いでませり。汝ども仕へまつらむや」と問はしめ給ひき。然るに兄宇迦斯、鳴鏑をもちてその使を待ち設けて射返しき。その鳴鏑の落ちたりし地を訶夫羅前といふ。兄宇迦斯、御子の御軍を待ち撃たむとて軍を聚めしかども、得聚めざりしかば、仕へまつらむといつはりて大殿を造り、その殿の内に押機を張りて待ちける時に、弟宇迦斯まづ御子の命の許にまゐり來て、拜みて白さく、「あが兄兄宇迦斯、天神の御子の使を射返し、待ち攻めむとして、軍を聚むれどもえ聚めざれば、殿を造りその内に押機を張りて待ち取らむとすと白しき。ここに大伴連等が祖道臣命、久米直等が祖大久米命二人、兄宇迦斯を召して罵りていひけらく、汝が作れ

みつみつし久米の子等が、粟生には**葎**一莖、其根が莖、其根芽
つなぎて、撃ちてしやまむ。

また、

みつみつし久米の子等が垣下に植ゑし**薑**口ひびく、吾は忘
れじ、うちてしやまむ。

また、

神風の伊勢の海の、大石にはひもとろふ、**細螺**のい這ひもと
ほり、うちてしやまむ。

又兄師木、弟師木を撃ち給へる時に、御軍暫しは疲れてありき。そ
の時の大御歌、

楯竝めて、伊那佐の山の木の間よも、い行きまもらひ戦へば、
吾はや飢ぬ、島津鳥鶉養がとも、今助けに来ぬ。

かくのごとく、荒ぶる神どもを従へやはらげ、参り來ぬ人どもを



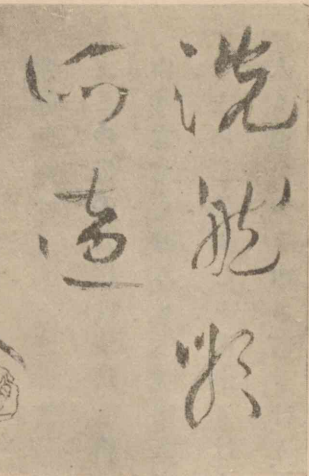
しただみ

拂ひたひらげ給ひて、畝火の白檮原宮にましまして天の下しろし
めしき。(古事記による)

宗輔のおほきおとは笛をぞ極め給ひける。あまり心ばへふるめさ
て、この世の人にはたがひ給へりけり。菊や牡丹など、めでたく大きに
作り立てて好みもち、院にも奉りなどして、ことこの世の用事など、
いと申し給ふことなかりけり。あまり足どはやくおはすとて、御供の
人も追ひつき申さざりけり。思ひかけぬことには、蜂といひて、人螿す
蟲をなむ好み飼ひ給ひける。かうなる紙などに蜜ぬりて、ささげてあ
りき給へば、幾らともなく飛び來て遊びけれど、大方つゆ螿し奉るこ
とせざりけり。足高角みじか、羽まだらなどいふ名つけて、呼ばれけれ
ば、召に従ひて、聞き知りてなむ來つつ群れるける。(今鏡)

二一 文學藝術の三作用

およそ人のその趣味性に適合せる文學、もしくは藝術に接するや、少くともその當座、暫くは心陶然として酔へるが如きを覺ゆべし。これを刹那の忘我と名づく。名



坪内道造筆

畫に見入り、巧なる音樂を聽き、又はおもしろき演劇を觀、おもしろき小説を讀める瞬間の感じ、即ちこれなり。

或はいまだ曾てかくの如き經驗なしといふ者もあらん。その生來の趣味性の極めて鈍きか、或はその鑑賞上の修養の不足なるが爲なるべし。藝術品の高尚に過ぎたる爲に趣味を感ぜしめざる場

洗然、順所、適、道造人

合、もしくは見馴れ聞き馴れざるが爲に聯想起らず、隨つて深き味を解せず、それがため興を覺えざる例はあれども、如何なる藝術品に對しても、いまだ曾て何等の面白みを感じずといふが如きは、人性の自然にあらず。又畫にもせよ、音樂にもせよ、詩歌、小説にもせよ、その他の藝術品にもせよ、いまだ曾て如何なる種類の人間をも恍惚たらしめしことなしといふが如きものあらば、それは名のみの藝術品ならん。苟も文學、藝術と稱する限は、少くとも忘我作用だけは具へざるべからず。知識の上流に位する者の卑しみ斥くる類と雖も、社會のある階級の嗜好よりすれば、忘我作用は勿論、それ以上の效力をも有する例おほし。

忘我以上の作用を予は遊神と名づく。こは當の藝術を鑑賞するその刹那、その瞬間のみ心恍惚たるにとどまらず、譬へばかの碁、將碁を好める者の、輸贏に我を忘るるが如く、その當座幾十分時時と

三月肉の云云
論語に、子在、
 齊聞韶、三月不
 知肉味、

してはその後二三時間、長き時はその夜一夜、甚しきは三四日、さながら夢みつつあるが如く惘然たるをいふ。能の後三日とはかくの如き經驗をいへるなり。三月肉の味を知らず」といへる。はたこの種の心境を指せるにはあらずや。蓋し藝術の供する感興の筏に乗りて、われ知らず情の海に浮び出でて、心を別天地に遊ばしむるをいふなり。屑屑營營たる現實界を離れて、一種理想的なる世界にさまよふをいふなり。かかる心境に遊ばしむるを文學、藝術の微妙なる作用となす。忘我作用にとどまれるはそのなほ甚だ低級なるを證す。

然しながら、藝術の眞作用は同化に至りて極まる。作用の遊神にとどまれる間は、譬へばかの安住の地を悟得せざるものと一般、一たびは現實を離れたりと雖も、いつ再び現實に復歸し來らんも知るべからず。所謂遊神は夢裏の心境なり。藝術の微妙なる力に魅せられたる間は、心暫く自我を脱して、或は飄逸なる、或は高遠なる、或は美麗なる別乾坤に遊ぶ。然れどもその夢の穩かなる間のみ、一たび穢き騒がしき現實界の聲に喚び起さるるや、美しき夢裏の幻影は忽然として消え、なまなかにその夢の美しかりしが爲に、更に愈現實の醜惡なるを覺ゆることなきにあらず。

思ふに、世間大概の人の經驗せる所ならんが、幼時にありては、如何に奇怪なる夢と雖も、少くともこれを夢みつつある間には、夢と心附くこと稀なるを例とす。然るに漸く成長し、自意識の發達するや、日夜に心を勞すること多きがため、夢も亦圓かなる能はず。随つてその夢みつつある最中に、こは夢なりと心附くこと次第に多し。これその夢の破れ易き所以なり。それと同理によりて、人人の自意識の著く鋭敏になり來れる今日においては、彼の忘我、遊神を最上の作用となし、一種の美しき夢に遊ばしむることを以て能事

了れりとなすが如き文學、藝術は、最早人心を魅するに足らず。隨つて假令刹那の忘我には用立つとも、長き遊神には用立たざるもの如し。現代の人は、藝術上の幻影か、現の人生か、殆ど辨別する能はざるまでに心酔し且同化せんことを欲す。かの偏に技巧に依り、空想に頼る文學、藝術の、今は昔時の如く歡迎せられざるは、主としてこの理に本づくなり。

文學、藝術の功用のなほ單に遊神にとどまれる間は、その果して男子畢生の事業となすに足るべしや否や、頗る疑なき能はず。人生は短し、藝術は壽しと古人はいひたり。然れどもこは果して古今、東西、幾何の文學、藝術にか適用せらるべき。英雄、豪傑の偉業は、權花一朝の榮にして、多くの星霜を経たる後には、空しく山丘と化し了れども、ひとり文學者、藝術家の大作品は、長へに日月を懸くといふ。そは果して事實なるべきか。古今、東西の名篇、傑作にして、今なほ眞に

人生は短し云

英國の諺。

權花一朝の榮

白樂天の詩に、

「松樹千年終是

朽、權花一日自

爲榮」。

空しく山丘云

李白の江上吟に

「屈平詞賦懸日月、

楚王臺榭空山丘」。

人心を鼓吹し得る程のもの、果して多く世に存せりや否や、げにや、長く世に玩賞せられて、一時の忘我用、遊神用に供せらるる程度のものは、東西共に決して少からざらんも、單にさばかりの功用にては、果して六尺の男子が心血を濺ぎ、六十年、五十年の壽命を四十年、三十年に縮めて、刻苦經營すべきものなるか否か、甚だ疑はしといはざるべからず。宗教か、育英か、社會の改善か、政治か、實業か、にたづさはりて、少くとも一國、一代の爲に身を獻ぜん方、或は一層立派なる事業にはあらざるか。予はかくはいへど、文學、藝術は、必しも毎に教化を目的とせざるべからずといふにはあらず。況やその實用的ならんことをや。畢竟ここには文學、藝術の目的を論ぜんと欲するにあらず。唯その作用において忘我、遊神以上に幾段を進めて、他を同化せしむる力を具へざる間は、いまだ眞の藝術的作用となすべからざるをいふのみ。

もしそれ同化作用を有する藝術に接せんか。人はその刹那において自我を忘れ、その當時幾何時か、全く現實を超脱して、さながら別天地に遊行する感あるべし。しかのみならず、その感の漸く薄らぎて自我に復歸せる後と雖も、多少わが好尚、もしくは性癖の一變したるが如き思あるを例とすべし。譬へば催眠術によりて精神療法を行はれたる不良少年などの場合に似たる心的現象を生ず。即ち穢かりし心も自然に美しく、荒唐しかりし心も自然に優しく、めいりたりし心も引き立ち、快活となり、嚴肅となる。一言にて評すれば、當の藝術品の内容と自家の心とが相融會して一となるなり。狹隘なる現實界以外、もしくは以上に、いつしか一の常住界、安住の別天地の成り立てるを意識して、何となく心に餘裕あるを覺ゆ。所謂心廣く、體胖かなる情態これなり。これを藝術の同化作用となす。かくの如くにして、時を経る間に、自然の勢として、この情態を自家以

心廣く云云
大學に、「當
レ屋徳潤レ身、心
廣體胖」。

外に推し及ぼさんと希ふ心を生ず。ここに至りては、逆に現實界を擧げて、藝術界にて藝術家の經驗すると全然同趣味のものとなさずんば止まざらんとす。ここに至りては、藝術家の態度は頗る宗教家の態度に似たるものとなり、強ひて勸化門を開きてなりとも、世を擧げて同一味に化せしめんと欲するに至る。

然れども、所謂同化作用は、或は高く、或は卑く、いづれの方向にも向ふ。善化の用をもなせば悪化の用をもなす。藝術の力はよく風を移し、俗を易ふ。かの健全ならざる藝術の風俗を壞ることある理も、これを推して考ふれば、自ら明白なり。古の賢君、明主は樂の正雅を貴び、淫哇を惡みき。音樂の人心を動かすことは最も廣く、かつ深ければならん。その理は移して以てあらゆる藝術の上に適用するを得べし。(坪内逍遙——作と評論)

坪内逍遙

文學博士。早稻田大學名譽教授。明治大正文壇の大功勞者。名は雄藏。愛知縣の人。安政六年六月生まる。

二二 生活の基礎

余は原則として、生活には必ず苦痛が伴ふものと考へてゐるから、まだいかにして愉快に生活し得べきかといふことを考へたことがない。然しながら、いかにすれば眞面目で確實な生活を爲し得べきかといふことに就いては、自分でも始終考へてゐるし、また時には人にも語つたことがある。そこで、今は主としてこの確實生活の根柢に就いて述べて見ようと思ふ。確實生活といつても、別に新しいものではない。要するに、昔からいひ舊るされて來た月竝的な堅實主義に外ならぬけれども、少くも余に取つては、この堅實主義は何ほどか體験的保證があるので、在來の説法以上に實際的權威を持つてゐるものと信じてゐる。

然らば、その堅實主義とはいかなるものか、概括的にいへば、堅實な人格的修養といふことになるが、自分はこれを三段に分けて考へてゐる。その第一綱領は能力の修養である。即ち自己の職務なり學藝なりに關して、その技能を鍊磨することである。いつの世でもさうであるが、特に今後の時代は全く實力の世で、一藝一能に達せぬものは、生きがひのある生活をするものが殆ど不可能である。世にはさしたる能力もなくして、外見上は可なり能力があるやうに裝うてゐる人もあるが、それは眞の欺瞞で、斷じて確實な生活に契合したやり方ではない。次第に競争が激しくなるに連れ、自然に淘汰され、凋落せねばならぬものである。眞に確實な、安心な生活をして行く爲には、自己の腕に對する確信が必要である。隨つてこれが爲には、何事をするにしても、絶えず自己の腕を磨いて、いつ、何處に出ても、一本立ちで行く事のできる實力を養つて置かねばならぬ。よく求職者の中には、自己の腕を磨くことは棚にあげて、徒に何等

かの情實の同情をたどつて良い地位を得ようなどと焦るものもあるが、これは非常な心得違である。いかに情實の世とはいへ、相當な實力のないものに對して、下から押し上げるわけにも、上から引き上げるわけにも行かないではないか。これに反して、實力さへ確實なら、その人の性格に特別な缺點のないかぎり、遅かれ早かれ、いつかは必ず芽をふく時節が到達せずにはゐない。勿論、世に立つて行くには、先輩、同輩、後輩の同情庇護に依らねばならぬ。しかし、その根本となるものは、飽くまでも自己の實力である。

但、確實生活の基礎を單に能力一點にあるとのみ考へるならば、それは大なる誤謬である。世には可なり實力を備へ、しかも外見上可なりの成功をしてゐるやうな人でも、自らその一生を清算して見れば、却つて失敗の生活をしてゐる人が少くない。それは何の爲か。これには種種の原因もあらうが、その大部分は、道德的缺陷の伴

ふ爲である。蓋し、道德的缺陷は、外見的成功の大きければ大きいほど、その生活に對する暗黒面を構成することも大きく、絶えずその生活を苦しめるからである。

そこで確實生活の第二綱領は、道德的修養を積むといふことであらねばならぬ。即ち自己の性格を陶冶して、道德的缺陷に陥らないやうにするのである。勿論、道德的修養とはいへ、模範的、道德家たれといふ意味ではない。蓋し、それは望ましくはあるけれども、常人に強ひてこれを求めようとすれば、却つて動もすれば消極的な、しかも偽善を養ふ弊に陥るからである。余のここにいふ道德的修養とは、要するに、健全な常識的、道德的判斷を以てして、少くとも平均線以上に出るやうにせねばならぬといふことで、これを消極的にいへば、公的生活は勿論の事、私的生活を公開しても、よしや模範的にはならなくとも、少くとも後めたい所のないほどの生活を期す

ることである。出來得べくんば、自己を天下の照魔鏡に照らしても常に光風霽月の心境に居りたいといふことである。

これに反して、道徳的・二重生活をすることは、最も避けねばならぬ。世の中に何が苦しいといつて、この二重生活をするほど苦しいことはあるまい。内と外と、言と行との相反する生活を一身に兼ねて行かねばならぬといふことが、どれだけ吾等の眞を害し、その勇を挫き、はては常に不安の生活を持ち來たすものであるかは、人人の、少くとも多少經驗したことであらう。特にその内面生活が一旦暴露されると、その人の地位なり名聲なりが、根柢から動搖するといつたやうな祕密を有する人の生活は、たとひ外的にはいかほど華麗であつても、内的にはいかに不確實であるかは、更めていふまでもない。世には綱渡りのやうな生活をしながら、それでゐて外見上成功してゐる人もあるので、道徳的修養を以て人生の進路に關

係しないかの如くに誤認する人もあるが、かやうなのは、眞に生活の奥義を究めないものといはねばならぬ。

最後に、確實生活の第三綱領は、宗教的・信念に安住することである。由來吾等の生活には、種種の不安や苦痛が必然的に伴ふものである。腕があり、徳行に不斷の注意を怠らぬ人でも、必しも常に幸福な生活を送り得ると限つてはゐない。時には意外の不幸に遭つて、悲歎失望の淵に沈まねばならぬこともある。特に今後生活上の壓迫がますます激甚となり、生存競争の熾烈になるに連れて、劣者は勿論のこと、優者と雖も、なほその背後には幾多の苦痛悲哀が附き纏つてくるものと覺悟せねばならぬ。かかる場合に於ける最後の慰安・光明は、どうしても宗教的・信念を措いて他に求める道がないのである。宗教的・信念のあるものは、いかに生活に疲れても、常にそこに深切な慰安を感じ、一道の光明を認めることができる。さうし

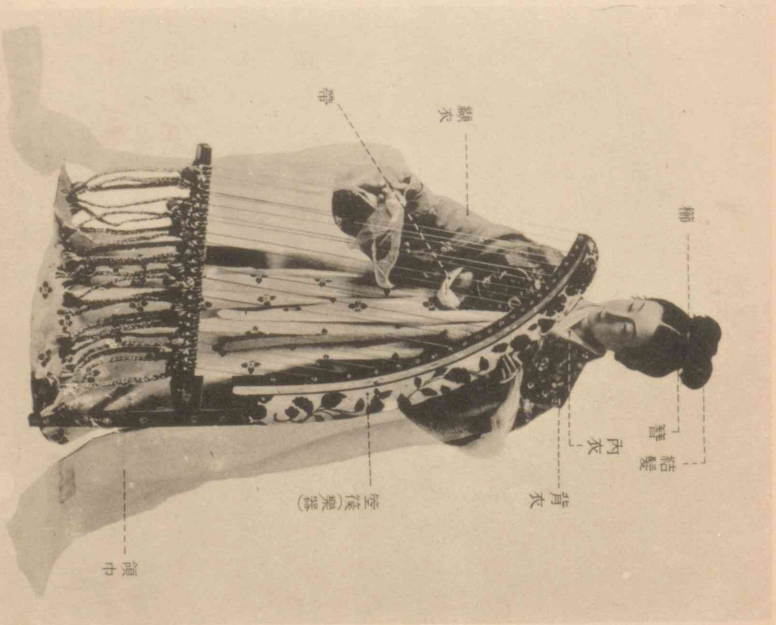
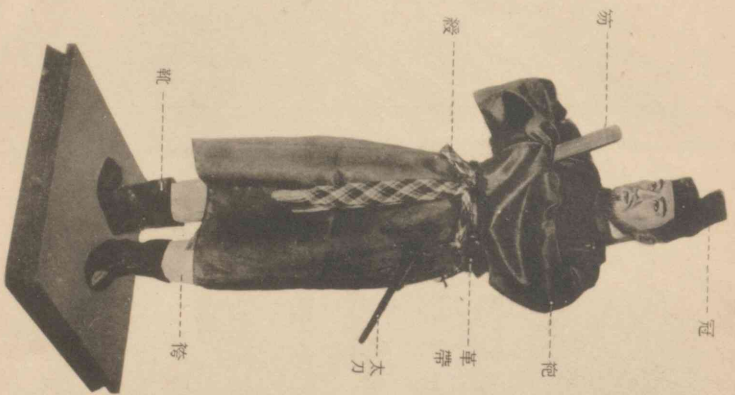
てこれは、やがて吾等の生活に對する偉大な支持となるもので、眞の確實生活は、ここに到つて、始めて不動の地位に到達するのである。宗教を信ずるのを老人の退屈しのぎでもあるかのやうに考へるなどは、信念と生活との根本關係に對して、まだ眞に知るところがないのに起因するのである。

いかに絮説しても、いかに論議しても、確實生活の根本といへば、これ等の三綱領に歸納され得るのである。活動の源泉も、調和の契機點も、發展の基礎もここに置かれるのであつて、生活の要諦は、歸するところ、この三綱領の外にはないと思ふ。少くとも余はこの確信の下に自分の生活を規定して、専ら努力してゐるのである。

(木村泰賢——解脫への道)

木村泰賢
文學博士。東京
帝國大學教授。
昭和五年四月歿
す。(二五四—
二五九〇年)

中等國語讀本 新修二版卷十終



奈良時代風俗

井山
山崎
吉岡

阿南
青地
荒井
千葉
深田
深堀
深羽
深口
山口
星野
池田
井上
神尾
香川
寛
川崎
菊池
吉本
倉田
中野
成瀬
仁礼
野村
小笠原
大友
大祐
有藤
菅原
境川
日下

國文學史

明治時代

文學と新聞紙

六百年來の武門政治は禮れ、舞臺は一廻轉して明治維新となつた。けれども明治十年頃までは、新分子と舊分子、進歩派と保守派との抗爭が隨處に行はれ、大建設の一方に大破壊の名残はまだ斂まらず、殺伐險惡な空氣が猶盛であつた。かかる事情の下に文學美術の發達があり得る筈がない。然し西南戰役を最終として國內の騷亂は幕を閉ぢ、民心も漸く統一して新時代の光を讚美するに至つた。處が新に齎された歐米の物質文化の光輝燦然たるを見ては、全くこれに眩惑せられて、國民は冷靜にその價値を比較判斷する餘裕などは無く、在來の和漢の學問技藝は固より、文學美術も宛ら弊履の如く棄てられ、一世を擧げて歐米文化禮讚の時代となつたのはまた餘儀ない現象であつた。この時に當つて細細ながら文學の命脈を繋い

江戸末期から行はれた讀賣五版といふものは、新聞紙の濫觴とも見られるが、然し組織的の立派な新聞紙は互版の發達したといふよりも、西洋の新聞紙に倣つたものである。明治元年に漢鹽草、江湖、遠近、内外等十數種の新聞紙が生まれ、同三年に横濱毎日新聞が出た。これが日刊新聞の元祖である。次いで同五年に東京日日新聞、報知新聞が創刊され、その後、曙、朝野、毎日、讀賣等の各新聞が出た。大坂朝日新聞は明治十三年、東京朝日は遙に後れて明治二十一年に發刊された。

だものは實に新聞紙であつた。新聞紙も無論西洋に學び政治的言論や社會事相の報道を使命とする實用功利の新時代の産物であつたが、大新聞と違ひ、小新聞はその經營策の上から、比較的知識の低い讀者の娛樂の爲に、文藝的讀物をも供給する事を考へた。かくて久しく江戸文藝の殘壘を守つて失意の境にあつた二三の戯作者一派が、明治文學の先頭に立つたのである。その代表者が假名垣魯文で、西洋道中膝栗毛、安愚樂鍋等の作を發表して一時の好評を得た。然し實はこれも舊文學の微弱な餘光であつて、これらの皮相輕佻な滑稽文學が、健全な新時代文學の母胎となり得る筈はない。眞箇の明治文學は江戸文學の延長刷新ではなくて、全く別途から崛起しなければならなかつた。その第一聲は即ち政治的翻譯小説の出現であつた。

翻譯小説の流行

新聞の連載小説は頗る當時の人氣に投じたが一方國民の自覺と西洋思想の輸入とによつて自由民權思想は次第に廣く浸潤し來たつて、従來新聞雜誌の上に政治論のみを試みてゐた人人も、此に於いて自己の主張を具體的に説明し、且容易に俚耳に入らしめる爲には、この種の文藝的作物が大いに力あることを認めて、或は英佛の政治小説を翻譯し、或

翻譯小説にはなほ織田純一郎の花柳春話、高田早苗、坪内逍遙の春窓奇話、末松謙澄の谷間の姫百合等があり、又これより先に渡邊温の通俗伊蘇普物語などもある。

はこれを換骨奪胎して、續續と發表した。矢野龍溪の經國美談、末廣鐵腸の雪中梅花間鶯、柴東海散士の佳人之奇遇、藤田鳴鶴の繫思談などは殊に著名であつて、慷慨激越よく當時の青年を刺戟感奮せしめた。その他アラビアンナイト、海底旅行、月世界旅行、驚濤、回島記等の興味本位の荒唐譚科學小説、冒險小説なども翻譯紹介せられた。但、これらの翻譯小説は勿論幼稚粗笨の筆で、人情の機微に觸れず、到底文學の眞諦を得たものとはいはれなかつたが、新味と生氣のある點で魯文一派に勝りやがて西歐純文學の翻譯を誘導して、更に明治新文學の醗酵を促したのである。

新文學の黎明

文學は古來久しい間社會から獨立の眞意義が認められず、殊に儒學の全盛と、大作家馬琴の出現とによつて、爾來小説は殆ど教戒の具として取り扱はれ、作家自身も戯作者の名に甘んじて、まだ自覺の域に達してゐなかつたが、明治十八年に至つて坪内逍遙の小説神髓が出づるに及んで、遂に迷夢は打破せられた。逍遙は文學が決して道徳や學術や他の物などの支配に屬するものでなく、人生を批評し誘導すべき獨自の存在であることを説明し、馬琴以來の勸善懲惡主義を小説界から驅逐して、大いに寫實

硯友社の創立は小説神髓の出る三箇月前であつたが、これに刺戟されて一層の眞劍味を加へたのである。

この頃大和錦、小説文庫、新小説、百花園、新文學誌、都の花などの小説専門雜誌や、新著百種といふ小説叢書も出た。

美妙は殊に文章に新工夫をなし、會話以外の地の文に言文一致體を試みた先驅者の一人である。

硯友社も露伴も描寫の態度は寫實的であつたに拘はら

ず、その題材や構想は全く作者一箇の空想から生まれ、空想的寫實派、空想的理想派とも名づくべきものであつた。

當時村上浪六は傳奇小説の流を汲み好んで任俠的意氣を描いて時好に投じたが、傳奇小説から一步進んで讀者の好奇心に投じたのは黒岩涙香の探偵小説であつた。又歴史小説に塚原漣柿岡があつたが、高山樗牛の瀧口入道は歴史小説として最も名高かつた。

主義に出づべき必要を提唱した。逍遙は大學出身の新人で、英文學の素養に憑つて新しい文學論を試み、更に自己の議論を裏書する爲に又當世書生氣質の長篇創作を公にした。この新文學黎明の第一鐘は、正に當時の文學青年の間に異常の衝動を與へた。これに共鳴して風を望んで起つた人人の中で、長谷川二葉亭は露國文學にヒントを得て傑作浮雲を出だした。又尾崎紅葉、山田美妙等は硯友社を組織して文壇に名告をあげた。

新文壇展開の種種相

かくて明治二十年頃から文壇は新生氣と新色彩とに満ちた。雜誌國民之友の評論は當時の政治文學兩方面を震撼せしめた。これに伴つて新聞紙は文藝附録を添へ、懸賞小説を募集する等、益々文藝勃興の機運を煽つた。硯友社は紅葉、美妙の兩人を中心として川上眉山、巖谷小波、廣津柳浪、江見水蔭等が前後してこれに加はり、我樂多文庫に據つて大いに活動した。殊に美妙は優雅な情想を清新の筆に託し、紅葉は行文の流麗を以て讀者を魅した。小波はやがて少年文學に轉じ、水蔭は後に冒險小説に走つた。當時から後年まで紅葉と並び稱せられたものは幸田露伴である。彼は殊に漢籍佛典にも通じてゐたので、雄渾の氣魄と神祕的構想とに富み、紅葉が

豐艶の筆を以てよく才人の情緒を描いたのに對し、露伴は遒勁の調で巧に男兒の意氣を寫した。

この外舊系統を牽いた作家に、櫻庭篁村、齋藤綠雨等があつた。篁村は八文字屋流の輕雋なる筆致を以て鳴り、綠雨は筆鋒辛辣皮肉にして寧ろ評論に適した。又森鷗外は獨逸文學に、内田魯庵は英文學に造詣深く、殊に鷗外の翻譯文學は創作以上の名譯と讃へられた。やがて文學界同人の新運動が開始せられ、熱烈なる基督教の信仰に立脚して、最も眞劍に人生觀照に徹しようとした若人の一團で、北村透谷を頭目とし、島崎藤村、馬場孤蝶、戸川秋骨、平田秃木等がこれに屬して、雜誌文學界が發刊せられた。彼等は著しく主情的で、奔放な感情を迸出し、在來の傳習を破つて新生命を擱まうとした。彼等の運動は詩壇に新しい寄與をした外に、實際的作品としては餘り多くの收穫を残さなかつたけれども、當時の作家に様様の暗示を與へたことは少くなかつた。

たまたま日本は東洋の老大國支那と戰つて大勝を博し、世界に於ける地位が非常に高まつたので、國民の意氣は大いに昂つた。國力の伸張に従つて

一葉の作は皆短篇で優れてゐたが、たけくらべ、にぎりえの二篇は殊に時代の先頭な歩んだ不朽の作と稱せられる。その文章は純國文體に思ひ切つて新装を加へ、西鶴の筆致をも混じて渾然たるものである。

紅葉露伴等も文章は西鶴を摸してこれに新工夫を加へた點が多い。

家庭小説では徳富蘆花の不如歸、思ひ出の記、菊池幽芳の己が罪、乳姉妹、柳川春葉の生さぬ仲、中村春雨の無花果などが最も喝采された。

文學の振ふのは當然であつてわが文壇は茲に一層の賑かな展開を見せた。當時の一異彩は樋口一葉であつた。流麗優雅の文を用ゐ、巧に人生の種種相を寫し出したその觀照眼の鋭さと、筆力の確かさとは、到底二十歳を越したばかりの一女性とは思はれなかつた。紅葉は多情多恨、金色夜叉等によつて益圓熟の技を示し、露伴は風流微塵藏、五重塔等によつて愈宗教的神祕的傾向を深めた。柳浪は今戸心中、變目傳等の名作を出し、鷗外は雜誌めざまし草を創刊しその他川上眉山や紅葉門下の泉鏡花、小栗風葉を始め後藤宙外、小杉天外、島村抱月など、盛に才筆を揮ひ、實に多士儕儕たる有様であつた。一方には逍遙、鷗外の論戰に續いて、田岡嶺雲、竹越三又、高山樗牛、綱島梁川などによつて、文藝評論や人生批評が盛になつた。かくて文壇の盛運は暫く續いたが、人心は漸く同一傾向に倦んで一轉化を求めようとした際、樗牛、紅葉等が相次いで死し、露伴は沈黙し、逍遙は一時去つて教育に専念し、文藝雜誌の有力なものは廢刊せられ、加ふるに文藝は風教を頽廢せしむるものとの非難の聲が教育倫理方面の學者から擧げられるなど、種種の事情によつて、文壇は一時沈滞に陥つた。この時に興つたのが所謂家庭小説で、不倫背徳を斥け、

笑と涙と好奇とを調劑して、上品な家庭の讀物となし、道徳的調子を高めようとしたのであつた。

藤村は續いて春、家等の大作を出し、花袋も妻、縁、生等の雄篇を公にした。

白鳥は何處へ、二家族、秋聲は微、足迹、關、星湖は少年行、などが代表作といはれる。

天溪の現實暴露の悲哀、抱月の文藝上の自然主義等は自然主義誘導に力あつた論文である。

十九世紀末から二十世紀の冒頭にかけて、歐洲では科學の發達につれ、唯物的思想、實證主義的精神が横溢して、從來の浪漫主義の夢は破られ、美も醜も差別なく、只一途に人生の眞なるものを求めて、忌憚なくこれを剔抉し描破しようとする態度が、文藝上にも唱道せられて來た。これは佛國のゾラが先づ主唱した所謂自然主義で、忽ち歐洲文壇を席卷し、それが丁度日露戰爭を境として、國民生活が物質的にも精神的にも劃然たる一轉機を示した時に當つて、洪水の如く我が國をも襲うたのである。これより先、小杉天外、國木田獨歩等はいち早くゾライズムに共鳴し、自然主義的傾向の作を發表して先鞭をつけたが、この時に至つて獨歩と共に島崎藤村、田山花袋などが、この主義の中心勢力となつて活動し始めた。藤村の破戒、花袋の蒲團はこの主義の第一線に立つたものである。又獨歩の作は皆短篇ではあつたが、一粒選りの名作と評せられた。その他正宗白鳥、徳田秋聲、中村星湖なども盛に健筆を揮つた。而して自然主義興隆に就いては、島村抱月を始め長谷川天溪、相馬御

漱石は元來俳句寫生文の方から小説に入つた人で、吾輩は猫である、虞美人草、草枕等は最もその色彩鮮明なものである。虚子には俳諧師、朝鮮等の作があり、鏡花には高野聖、三味線瑠璃等がある。

黙阿彌の作では高橋月白浪の如きは最も優れてゐる。但彼の作には多少時代の空氣を示さうとして明治初期の世相を背景にしたものもあるが、その内容はやはり勸善懲惡に立脚した舊文藝の系統を

風、片上天弦等所謂早稻田派の評論家が大いに興つて力があつた。早稻田派に對して、鈴木三重吉、森田草平、野上白川等の赤門派もまた擡頭した。かくて自然主義は殆ど文壇の主潮をなして明治の末年に及んだが、この間にあつて自然主義に反抗したのは鷗外と夏目漱石とであつて、前者は藝術の上で遊びの氣分を認容して高踏派と呼ばれ、後者は東洋趣味、禪味、俳味の如き餘裕を主張して低徊趣味といはれた。高濱虚子も漱石の亞流であつた。又以前から神祕的怪奇的傾向を帯びてゐた鏡花は、この頃極度にその特色を深め、超然として獨自の道を歩んでゐた。而してさしも全盛を極めた自然主義も、明治の末年に至つて漸く下火となり、更に一轉化の機運を見せ初めた。

戯曲の進歩

戯曲の發達逕路は小説と稍趣を異にする。即ち幕末掉尾の劇作家たる河竹默阿彌は明治二十六年まで生存したので、明治の初期から二十年近くまでの文學不振の間にも、幾多の優れた作を出してゐた。その他にも勿論劇場には專屬の作者があつたが、擧げるに足る程の者は無かつた。明治十六年逍遙は沙翁のシーザーを淨瑠璃風に翻譯して自由太刀餘波鋭鋒を著はしたが、上演せられず、その頃から演劇改良論が漸く起り、ついで新

離れなかつた。なほ前期に屬するもので三人吉三、村井長庵などの作が有名である。櫻痴の作では俠客春雨傘、春日局などが傑作と評せられる。

舊歌人の錚錚たる人人を擧ぐれば、加藤千浪、伊藤祐命、鈴木重嶺、本居豊顯、小出榮等はその重なるものであつた。

派劇の濫觴たる壯士芝居も生まれなければ、またそれに適應する好脚本は現はれなかつた。二十年代に至り史劇が勃興して、依田學海、宮崎三味等が戯曲に筆を執り、その後福地櫻痴が政治論から退いて、黙阿彌の後を繼ぎ、市川團十郎と提携して劇界に雄飛した。然し學海、三味等の作は只史實の再現に過ぎず、櫻痴とても従來の劇の品位を高めた功勞は認められるが、何れもまだ藝術的價值には乏しかつた。たまたま逍遙は史劇論を著はして劇文學革新の第一聲を揚げ、續いて桐一葉を作り、更に牧の方を公にした。新文學としての價值ある戯曲は茲に始めて提示せられたのである。その後逍遙は暫く教育方面に去つたが、又再び打つて出で、幾多の戯曲を發表し、又新樂劇論を著はして樂劇を唱道し、新曲浦島を作つた。かくて戯曲は次第に發達し、鷗外も盛に翻譯劇を紹介し、岡村柿紅、松居松葉、山崎紫紅、岡本綺堂などの作家も出で、抱月を始め小山内薫、中村吉藏等の新進文士も戯曲に向つて、創作に翻譯にとりどりの技倆を示した。

和歌の革新

明治天皇は稀世の歌聖にましまして、御一生の御製も十萬に上ると承はるが、夙に御歌所を置き、毎年勅題を賜はつて、國民の詠進を許

落合直文の歌は萩之家歌集一卷に收められてゐるが、近時刊行された落合直文集には歌文全部を載せてある。

服部躬治、久保猪之吉、等も淺香社にあつて活躍した。

し給うた。而して八田知紀の門人高崎正風がその所長として奉仕したが、さしも榮えた桂園風も強弩の末魯縞を穿ち得ぬ様となり、その他朝野の歌人皆陳套なる花月の閑吟をなすのみで、箇性の閃も時代の匂も認められず、殊に歐化主義全盛の時代とて、氣鋭新進の人にはこれを顧みる者もなかつた。この沈衰状態は久しく續いたが、歐化主義の反動として國粹保存が力説せられ、國學新興の機運が醸されるに及んで、漸く和歌革新運動も起つて來た。その先驅にして且主力は落合直文であつた。直文は新興國文の普及に大功があつたが、第一次に歌學會を興して、小中村義象、金子元臣等と共に雜誌歌學に和歌革新の第一聲を放ち、第二次に與謝野鐵幹、金子薫園、尾上柴舟等の門下を率ゐ、淺香社を興して新短歌建設に邁進した。但、直文自身の作はまだ内容に於いて全く舊套を擺脫したとはいひ難かつたが、觀察や表現の清新な點で舊來の型を破つた。而して師の業を承けて正面から最も短歌革新に奮闘したのは鐵幹で、殊に後年妻晶子と共に雜誌明星を發刊して、所謂明星派全盛時代を作り出し、盛に浪漫的傾向を高唱した。薫園は淡雅な叙景歌を鼓吹し、柴舟は理智的、冥想的の歌を詠み、この三者何れも多數の優秀な門下

子規の系統では伊藤左千夫が最も優れ、長塚節も働いた。

を出したので、歌壇は一時に百花繚亂の景を現はした。又直文と別途を歩んで短歌革新の脇役を演じたのは、佐佐木信綱と正岡子規とであつた。信綱は門下と共に竹柏會を結び、多く浪漫的傾向を以て溫雅な情趣を歌ひ、子規は俳句革新の餘力を和歌に伸ばして、萬葉への復歸を叫び、殊に純客觀的表現を主張した。

然るに、やがて自然主義の思潮が文壇を占領するに至るや、浪漫的傾向の強い歌人等も、遂にその埒外に晏如たるを得なくなつたので、ここに自然主義の洗禮を受け、在來の美しい夢を棄てて、生活苦や赤裸裸の情感や、すべて人生の眞實を探究して叫ばうとする欲求に動かされた。かくて柴舟門下の若山牧水、前田夕暮、及び明星派の石川啄木等によつて第二次革新が行はれた。啄木は殊に天才的で、彼が歌境と大膽な表現とは全く獨自であつて、土岐哀果の如き追隨者があつたけれども本質の差は一目瞭然であつた。

俳句の更生

俳句は幕末以來、病は愈膏肓に入り、明治になつても老鼠堂永機、春秋庵幹雄などが纔に因襲的態度を墨守してゐたのみで、文學的價値も無く、全く俗了して無學低級の人人に玩弄せられるに過ぎなかつた。然る

紫吟、秋聲、筑波等の各派は日本派の如く主動的地位には立たなかつたので勢力は強くなかつたが、側面から俳句革新を翼賛した功は認められる。

にこれも國文新興の機運に乗じ、直文の短歌革新と殆ど時を同じうして、正岡子規が革新の烽火を揚げた。子規は新文學の素養と古句研究の鑑識とから、俳句の文學的價值を認め、又當時の客觀的描寫を主とした洋畫から影響を受けて、殊に蕪村に私淑し、純客觀描寫を唱導し、盛に論じ盛に作つて、久しく墮落してゐた俳句に遂に新生命を吹き込んだ。子規の運動を助けて大成せしめたものは、主にその門下の河東碧梧桐、高濱虚子と内藤鳴雪とであつた。子規は日本新聞に據つてゐたので、その一派を日本派と呼んだ。夏目漱石、石井露月、松瀬青青などもその一味であつた。又別に紅葉、小波等を中心とする紫吟社一派があり、これは日本派と傾向を異にして檀林風を帯び、好んで人事を歌ひ都會情調を鼓吹した。その他角田竹冷、戸川殘花等の秋聲會や、大學出身の大野洒竹、佐佐醒雪、沼波瓊音等の筑波會なども前後して起つた。子規の遺業は虚子によつて繼承せられ、今もホトトギス派として依然俳壇の正系を占めてゐるが、自然主義の奔流はやはり俳壇をも浸さずには置かなかつた。即ち明治の末年に至り、碧梧桐は新傾向句を提唱し、必しも十七音の既定型に由らず、極めて自由な格調で複雑な人間生活の實相を詠じよ

うとした。萩原井泉水もこれに和して起ち、その他の新人も虚子一派以外は多くこれに共鳴した。

詩の生育

新體詩抄以來久しく新體詩といふ名稱は行はれたが、今は詩又は長詩などと呼んでゐる。この先驅三家は皆本來が學者ではあり、且始めての試みであるから、未だ生硬粗笨を免れず、詩味は甚だ乏しかった。然し創始の功は大きいといはればならぬ。藤村の若菜集、一葉舟などは全く當年の青年男女を魅了したものである。然し彼は後年詩筆を折り小説に轉じた。晩翠の傑作は天地有情であらう。有明の獨絃哀歌、泣菫の行く春、暮笛集も好評があつた。

音樂的諧調を有する口説き文句は、鎌倉以後の著作物中に剪裁せられて夥しい程であつたが、まだ詩篇として獨立して居なかつた。江戸後期に及んでの長歌としての村田春海の王昭君、又は久阪玄瑞の七卿落の作の如きは、實に明治の詩の先驅をなしたものであらう。明治になつては福澤諭吉の世界國盡しがあるが、然しこれは單に形式上だけで、内容は微塵も文學的の句を留めたものではない。處が新興國民の情懷を盛るには、短歌俳句の如き小詩形は甚だ不可で、是非雄大莊重な詩形を需める要があるとの主張の下に、明治十五年井上巽軒、外山、山矢田部尙今の三家が共力して新體詩抄を公にした。收むる所は創作、古傳説の翻譯、西詩の翻譯など様様であつた。その後、直文の孝女、白菊の歌も出で、中西梅花、宮崎湖處子、大町桂月、鹽井雨江なども盛に詩作を試みたが、文學界同人の主情的な詩に至つて、始めて詩らしい詩に到達した。この一派中殊に優れたのは藤村で、最も主情的傾向が強く、深い哀感を豊麗溫雅な調に託して詞章の靈妙を極めた。藤村と相並

白秋の出世作、思ひ出及び邪宗門はその新鮮な感覺と異國情調とで當時の詩壇の驚異であつた。

この新運動は當然起るべき現象で、殊に口語詩の主張は確に有意義の事であり、詩の民衆化といふことに利益があつたが、その代りに又詩を平凡化し低調化する弊をも伴ふの餘儀なきに至つた。口語詩の主唱者は相馬御風等であつた。

んだのは土井晩翠であつた。彼は漢語を驅使することが頗る自在巧妙で、好んで長篇を物し、雄偉莊重の調を以て推稱せられた。間もなく時は移つて、次いで蒲原有明、薄田泣菫の對立時代が來た。有明の詩は象徴主義に立脚したもので、神祕的陰影を帯び、泣菫の詩は藤村に酷似した主情主義で感傷的であつた。その他鐵幹、前田林外、河井醉茗等も盛に詩作したが、やがて又横瀬夜雨、人見東明、北原白秋、三木露風などの優れた新人が多く輩出して、詩壇は眞に燦爛たる光華を發した。然しながら詩壇にも亦例の自然主義の影響によつて一轉機が來た。これまで皆空想本位で美に憧れつつ歌ひ續けてゐた詩人達は、その舊態を排して現實に根をゑろすことを重視するやうになつた。かくて内容の變化すると共に、窮屈な形式の約束をも破壊して自由な韻律に従ふべきを主張する者を生じ、更に進んで口語詩が提唱せられた。

明治の文章

更に純文學の範圍外に在つて、或は議論に、或は説話に、或は學術に、或は隨筆に健筆を呵して文章の模範を示したものを究めると、かの生硬な漢文直譯流が普く行はれてゐた中に、既に福澤諭吉、成島柳北、福地櫻癡等の平易明快な文字があつたが、次いで三宅雪嶺、陸羯南、福本日南、徳富蘇

峯等が出て盛に莊麗雄渾の筆を揮つた。又落合直文、小中村義象等の新國文宣傳の聲は一時を風靡し、かくて美文、紀行、小品文等に大和田建樹、大町桂月、鹽井雨江などが出て、巧に和漢洋の文章の妙を調和融合してそれぞれ特色ある文體を創始し、明治の文章の基礎をなした。

大正昭和時代

小説戯曲界の進展

自然主義の文學が人生の眞實を寫すといふ主張はよかつたものの、浪漫主義の反動として強ひて好んで暗面描寫にのみ傾いた結果、極めて彈力の無い醜惡な人生相のみが我等の前に展開せられたので、世は漸くそれに不満を感じて、眞の力ある自覺的文藝の出現を要望した。かくて大正の初頭には、人間の生命力を高調する叫が所在に起つて、片上伸、中澤臨川、田中王堂、阿部次郎等の新進批評家はその陣頭に立つた。而して當時非常な勢を以て浸入して來た、露のトルストイ、ドストウエフ、スキナー、印度のタゴール、佛のベルグソン、ロマンローラン、英のショウ、ラッセル、獨のオイケン等の新思想が盛に紹介せられた。これらは人間心靈の勝利を確信し、創

武者小路實篤の作では、愛慾、その妹などが代表的のもの。有島武郎では或女、カインの末裔、惜しみなく、愛は奪ふ、などが稱讃される。各作家の出世作又は代表作として喧傳されたものを舉ぐれば、
吉田絃二郎の白路、人間苦。
菊池寛の恩讐の彼方に、蘭學事始、忠直卿行狀記等。
芥川龍之介の鼻、薯汁、秋、手巾、地獄變、羅生門等。
久米正雄の破船、神の如く弱し等。
里見淳の多情佛心、おせつかい、幸福人等。
志賀直哉の暗夜行路、和解等。
室生犀星の蒼白き葉篇、美しき水河

造的進化の新生活を謳歌し、又は箇人意識から社會意識へと推移して現代社會の改造を力説するもので、現實暴露にのみ著する自然主義を非とした。かくて機運は熟し、茲に新理想主義の高唱を聞くに至つたが、やがてそれは又、或は新現實主義といひ、或は新浪漫主義といひ、更に幾多の傾向に分裂しつつ進展した。然しこれらも皆その基礎は自然主義の上に置かれたものであつた。即ち現實の醜を認めたとて、その上に理想を建設し、或は現實を人性の上から解釋しようとするものであつて、皆人性の基礎の上に立つてゐる所に、明治時代の皮相な理想主義や浪漫主義とは異なる點があるのである。これらの新しい群の中で、最も目ざましかつたのは白樺派の出現であつた。新理想主義の思想的中樞をなすものは人道主義であり、更にいへば愛である。白樺の人人は華胃界の新人で、元來それ自身の生活境遇が光明に富んでゐたので、自然主義に共鳴せずそれが外來思想に啓發せられて、茲に新理想主義を標榜して、眞摯なる藝術態度を執るに至つた。この代表者ともいふべきは武者小路實篤、有島武郎等であつた。又白樺同人ではないが、倉田百三、吉田絃二郎等もこの範疇に入るべき人人であつた。鋭利な理智の刃を以て

等。
佐藤春夫の田園の憂鬱、都會の憂鬱等。
藤村は外遊から歸つて後、新生、嵐等の力作がある。花袋は時は過ぎゆく、或僧の奇蹟等を出した。
谷崎潤一郎の刺青、麒麟、玄奘三藏、愛すればこそ等。
荷風の冷笑、おかめ笹等。
漱石の行人、道草、明暗等。
鷗外の高瀬舟、山椒大夫、寒山拾得等。
戯曲では、逍遙の名残の星月夜、義時の最後、役の行者。
小山内薫の西山物語。
中村吉蔵の井伊大

心理解剖に特殊の手腕を揮つて人生を諷した菊池寛と、史的事實の新解釋と、洗練せられた技巧とを以て獨自の一角を拓いた芥川龍之介とは、新現實主義の中の雙璧と目せられ、久米正雄、里見淳、志賀直哉、室生犀星、佐藤春夫等もその中樞をなす作家と見られた。明治から續いた作家では、自然主義の頭目であつた藤村、花袋の二家は更生の意氣を以て新味ある力作を公にし、白鳥、秋聲又健在し、新浪漫主義の谷崎潤一郎は特異の官能描寫に魅力ある筆を揮ひ、享樂派ともいふべき永井荷風は益圓熟を加へて時流の外に超越し、餘裕派の漱石、鷗外も老來更に蘊蓄を傾けて花花しい活動をなしたが、間もなく漱石、鷗外の二巨星が精力正に旺盛の時忽焉として歿したのは、實に文壇の大損失であつた。
やがて振古未曾有の世界大戰が起つた。この動亂を経過すると、世界の思潮に又大變革が起り、我が國へもマルキシズムといひ、レーニズムといひ、アナキズムといひ、様様の社會主義思想が殺到した。隨つて文學にもこれが反映して社會主義的文藝が蔚然として擡頭し、從來の文藝をすべて有産有閑階級の玩弄品と目して排斥し、自らプロレタリア藝術と號して無産大衆

老の死。
長田秀雄の大佛開眼。
山本有三の歐崎出羽守、同志の人人。
倉田百三の出家とその弟子、俊寛。
松翁(元の松葉)の茶を作る家。
綺堂の修善寺物語、箕輪心中等。

の文藝を創造すると叫んだ。而して小川未明、加藤一夫等がその先頭に立ち、有名無名の新人が多くこれに随った。

翻つて戯曲を見ると、逍遙は後半生を殆ど演劇の爲に捧げたかの觀があり、幾多の優秀な戯曲を作り、更に兒童劇、ベーズント劇にまで進んで、或は議論に、或は創作に、常に斯界を指導したのみならず、又永年に互り、沙翁の戯曲全部を譯了して、偉大な功績を擧げた。更に新人では、小山内薫、中村吉藏、長田秀雄、山本有三、倉田百三等があり、菊池、久米、谷崎、久保田万太郎等の如く、小説家にして又この領域にまで進出したものも少くない。松翁、綺堂等も引き続きいて活動してゐるが、但、彼等は概念的な稍低い民衆趣味の圈内に彷徨するものだといはれる。

詩歌壇の推移

短歌はこの期に入つて、鐵幹夫妻は往年の意氣を示さなくなつたが、信綱、柴舟、牧水、夕暮、白秋、空穂等は各機關雜誌に據つて社中を率ゐ、天下の青年男女を糾合して活動し、全く空前の盛況を呈した。中でも子規の流を汲み、島木赤彦、齋藤茂吉、古泉千樫等を頭目とするアララギ一派は最も優勢で、一時歌壇の覇者の如く見え、たが、これは畢竟萬葉崇拜の餘響とい

はねばならぬ。牧水、夕暮も今は平穩に歸して鮮明の特色が少くなつたが、ひとり中に白秋は多方面に豊富な才藻と洗鍊せられた表現力とを以て、優れた地位に立つてゐる。一般に純客觀描寫、叙景詩が歌壇に大部分を占めるに至つたのは、寫生を力説したアララギの力もあらうが、主因は短歌専門雜誌流行の結果、強ひても毎月多作する必要に迫られ、その易きに就いた事にあるであらう。然し時代思潮と没交渉な叙景歌のみが、いつまで鋭敏な現代人の満足を買ひ得ようか。茲に於いて口語歌といひ、生活派といひ、プロレタリアの歌と稱し、時代に觸れた運動は起つて、今や又歌壇は一轉機に立つてゐる。しかも天才は未だ出でず、革新の業は猶中道にある。

俳句は、虚子一味のホトトギス派も往年の精彩なく、只日本派の殘壘を守るのみである。碧梧桐一派の新傾向は、その主張と作句の内容とはともあれ、表現の方法に至つては容易に諾き難く、同じく新傾向と稱する中にも、井泉水の態度に同感せられる點が多いやうに見える。

詩壇を展望すると、口語詩、自由詩の運動は既に完成して、花やかな白秋、露風の對立時代となり、外に高村光太郎、萩原朔太郎、川路柳虹、野口雨情等があ

十七音の定型を無
慚に蹂躪し去つた
新傾向派が近年再
びその定型を思慕
するやうな風があ
るのは、俳句その
物の本質の上から
見て注意すべき現
象であらう。

り、稍後れて千家元麿、白鳥省吾、尾崎喜八等が出た。詩も亦新思潮の影響を受け、民衆詩人と號して社會的、大衆的傾向化を主張するものが非常に多くなり、盛にその作が發表せられたが、所謂民衆的詩人の作中には、只低調無價値な、寧ろ騒音雜音に近い律調が多數で、やはり藝術的氣品と香氣とを保つてゐるのは上述諸家の作に求めねばならぬやうである。而して茲に詩壇について特筆すべきは、所謂童謠、民謠の興隆である。これ亦行き詰つた詩壇の局面打開方策が一因となつて生まれたもので、白秋が主唱し、雨情、西條八十等がこれに共鳴してその代表的作家となり、その他の作家も亦これを試みて、今正に流行の頂點にある。

研究的方面

現代文學を論ずる者は創作方面をいふにのみ忙しくて、研究的業績を忘却するが常であるが、これは甚だ不當である。文學研究は文學評論と相俟つて、純文學創作を補翼し、或は指導すべきものである。大槻文彦、落合直文、上田萬年、芳賀矢一等は既に明治時代に國語研究に先驅者としての迹を印したが、殊に芳賀矢一、藤岡作太郎の兩家は國文學史の體系を組織した上に於いて最大の功勞者であつた。大正に入つては神話傳説に高木敏

雄、謠物に高野辰之、歌學史に佐佐木信綱、俳諧に沼波瓊音等の諸家があり、佐醒雪、藤井紫影、藤村作などは江戸文學研究に大なる寄與をなしてゐる。

結語

昭和の新時代はまだ日が淺く、すべての事象に於いて大正末年と切り離して論ずることは不可能である。故に上來説述した所も皆昭和の今日まで引き續いての情勢である。只最近の新現象として挙げ得るのは、所謂大衆文學の流行である。これは明治の家庭小説を更に低調にしたもので、全く知識、趣味の低い階級の娛樂物に過ぎないが、しかもこれらが大量生産として數萬冊を一時に提供せられる結果、或は眞の高級な文藝の發達を阻礙しはせぬかと疑はれざるを得ない。更に今一つ好ましからぬ現象は、文藝のあらゆる方面に於いて、今日ほど優秀な新人の進出を見ない時期は稀なことである。昭和文學の振興は、一に懸つて現に學窓にある青少年諸子の手にあることを記憶せねばならぬ。(金子元臣)

三五〇

三五六

正

一五

坪

森

江口 芥川龍之介 菊池寛 小川未明 久米正雄 谷崎精二 里見淳 志賀直哉

三
尾山篤二郎

内

野口米次郎

- 【新理想主義】
- 【新現實主義】
- 【社會問題】
- 【大衆文藝】
- 【翻譯文學】
- 【新詩、童話】

芥川龍之介 菊池寛 小川未明 久米正雄 谷崎精二 里見淳 志賀直哉

尾山篤二郎

野口米次郎

新理想主義
新現實主義
社會問題
大衆文藝
翻譯文學
新詩、童話

現代文學一覽

研究	二五〇					二五三〇				紀元
	正	大	治	明	應慶	元治	久文	萬延	政安	
神原芳野	一五	元	四〇	三〇	二〇	一〇	元			
福澤諭吉										
假名垣魯文										
古河默阿彌										
井上文雄										
角田竹冷										
外山、山										
坪内逍遙										
評										
論										
小										
說										
戲										
曲										
和										
歌										
俳										
句										
詩										
翻譯及散文										

作

者

作

品

(天保十一)

(弘化四)

道言隈大
覽 曙 橋
紀知田八
月蓮垣田太

規子岡正

山高
葉紅崎尾
石漱目夏

作岡藤
亭葉二川谷長

峯蘇宮德
伴露田幸

一矢賀芳
花蘆宮德

月抱村鳥
雲醒佐佐
綱信木佐
堂綺碧岡
桐梧東河
寬野謝與
子虛濱高
舟柴上尾
村袋花山
村藤崎鳥

藏吉村中
內山小

燕北
原谷
白崎山
秋潤本
耶一有山
三池菊

寬池菊
介之龍川芥

【政治小説】

【新體詩の創始】

【小説の革新】

【俳の句革新】

【和歌の革新】

【戲曲の革新】

【新體詩の隆興】

【和歌評釋の創始】

【評論壇の勃興】

【自然主義】

【餘裕派の小説】

【新浪漫主義】

【和歌の新調】

【新理想主義】

【新現實主義】

【社會問題】

【大衆文藝】

【翻譯文學】

【新詩、童話】

【啄木歌集】

【若菜集】

【天地有情】

【櫻牛全集】

【蒲團、破戒】

【漱石全集】

【翻譯及散文】

	三五八六	三五八〇	三五七〇	三五六〇																																		
研究	神原芳野	近藤芳樹	小中村清矩	黑川眞頼	物集高見	木村正辭	鈴木弘恭	大槻文彦	中村秋香	坪内逍遙	上田萬年	芳賀矢一	井上通泰	佐佐醒雪	藤岡作太郎	金子元臣	藤井乙男	高野辰之	佐佐木信綱	沼波瓊音	藤村作	松井簡治	五十嵐力	水谷不倒	伊原青青園													
評論	福澤諭吉	坪内逍遙	森鷗外	高山樗牛	島村抱月	綱島梁川	徳富蘇峯	三宅雪嶺	山路愛山	大町桂月	相馬御風	長谷川如是閑	吉江孤雁	千葉龜雄	阿部次郎	安倍能成	杉森孝次郎	三井甲之	吉田絃二郎	生田長江	廣津和郎	高須芳次郎																
小説	假名垣魯文	矢野龍溪	末廣鐵腸	柴東海散士	豊庭篁村	坪内逍遙	山田美妙	長谷川一葉亭	尾崎紅葉	川上眉山	泉鏡花	幸田露伴	廣津柳浪	樋口一葉	徳富蘆花	菊池幽芳	田山花袋	島崎藤村	國木田獨步	小杉天外	永井荷風	正宗白鳥	徳田秋聲	夏目漱石	高濱虚子	長塚節	武者小路實篤	有島武郎	長與善郎	志賀直哉	里見直	谷崎精二	久米正雄	小川未明	芥川龍之介	江口渙		
戯曲	古河黙阿彌	依田學海	福地櫻痴	坪内逍遙	島村抱月	高安月郊	松居松葉	中村吉藏	谷崎潤一郎	岡本綺堂	山崎紫紅	倉田百三	山本有三	長田秀雄																								
和歌	井上文雄	加藤千浪	高崎正風	黒田清綱	稅所敦子	小出榮	落合直文	井上通泰	坂正臣	大口鯛二	金子元臣	與謝野寛	金子薫園	尾上柴舟	正岡子規	伊藤左千夫	與謝野晶子	佐佐木信綱	石川啄木	窪田空穂	吉井勇	北原白秋	土岐哀果	若山牧水	前田夕暮	齋藤茂吉	島木赤彦	古泉千桎	太田水穂	尾山篤二郎								
俳句	角田竹冷	戸川殘花	正岡子規	内藤鳴雪	高濱虚子	河東碧梧桐	坂本四方太	大谷繞石	夏目漱石	萩原井泉水	松瀬青青	山根東洋城	尾崎紅葉	伊藤松宇	巖谷小波	岡野知十	大野酒竹	佐佐醒雪	藤井紫影	沼波瓊音	服部耕石																	
詩	外山、山	中西梅花	落合直文	大和田建樹	鹽井雨江	武島羽衣	天町桂月	與謝野寛	島崎藤村	土井晚翠	薄田泣菫	蒲原有明	河井醉茗	岩野泡鳴	幸田露伴	上田敏	相馬御風	北原白秋	三木露風	西條八十	野口雨情	室生犀星	萩原朔太郎	川路柳虹	百田宗治	千家元鷹	生田春月	尾崎喜八	白鳥省吾	野口米次郎								
翻譯及散文	坪内逍遙	森田思軒	大和田建樹	森鷗外	黒岩淚香	長谷川一葉亭	徳富蘆花	上田敏	昇曙夢	小山内薫	厨川白村	生田長江	馬場孤蝶	杉村縦横																								

【新體詩の隆興】 若菜集
【和歌評釋の創始】 天地有情
【評論壇の勃興】 樗牛全集
【自然主義】 蒲團、破戒
【餘裕派の小説】 漱石全集
【新浪漫主義】
【和歌の新調】 啄木歌集
【新理想主義】
【新現實主義】
【社會問題】
【大衆文藝】
【翻譯文學】
【新詩、童話】

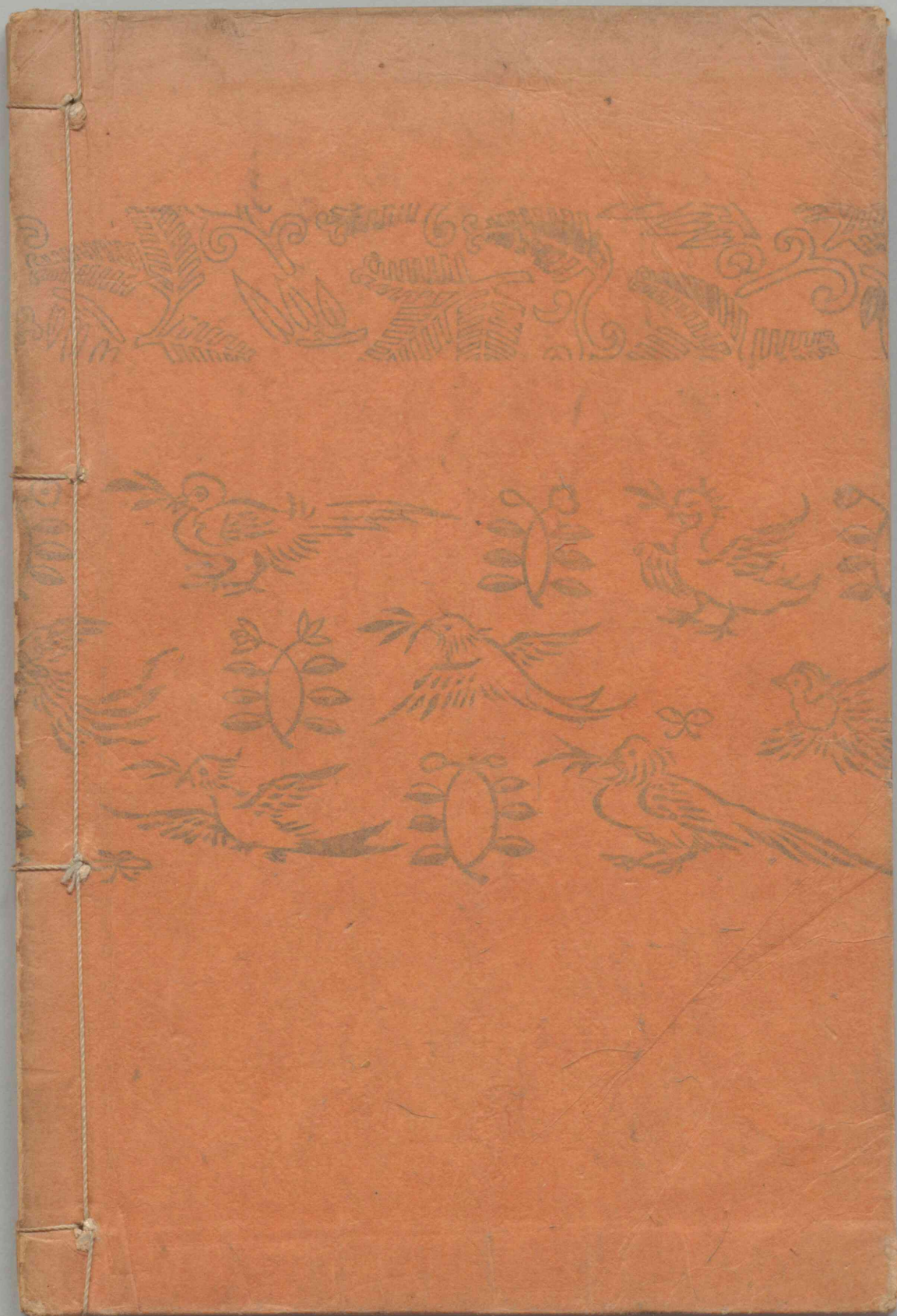
覽一畫繪本日

飛鳥	奈良	平	安	鎌倉	室町	桃山	江戶	明治	現代
----	----	---	---	----	----	----	----	----	----

倭		繪	
巨勢	勢	佐土	(口田粟・吉住)
巨勢金岡 巨勢弘高	宅磨爲成	藤原基光 藤原隆能 藤原光長 藤原隆信	藤原隆信 藤原光長 藤原隆能 藤原隆信
	宅磨爲久	土佐經隆 姉小路長隆 高階隆兼 住吉慶恩 藤原信實	土佐經隆 土佐光信
			粟田口隆光 土佐光信
			土佐光起 岡田爲恭
			山名實義 守住實魚 河邊御楯 安田靱彦
			小堀朝音 松岡映丘 吉川靈華

漢			(宗北) 畫	
雪舟	派	狩野	派	野
雪舟 雪村	雪舟等類 長谷川等伯	狩野永徳 狩野山樂 海北友松	狩野守信 狩野常信 狩野山雪	英一蝶
曾我蛇足	曾我蕭白	岩佐勝以 宮川長春 西川祐信 喜多川歌麿 勝川春章 葛飾北齋 歌川豐國	本阿彌光悅 尾形光琳 酒井抱一 鈴木其一	酒井道一
	長谷川雪堤	月岡芳年 水野年方 稻野年恒 尾形月耕	田能村直入 田崎草雲 野口幽谷 瀧和亭	野口小齋 兒玉果亭 小室翠雲 跡見花蹊 富岡鐵齋 松林挂月
		右田年英 武内桂舟 楠木清方 上村松園 池田輝方		

寫生		南宗畫派		裝飾畫派		浮世繪派	
四	圓山派	沈南蘋	谷文晁	渡邊華山	柴田是眞	鈴木百年	久保田米僊
松村月溪 松村景文 森狙仙	圓山應舉 長澤蘆雪 山口素絢 駒井源琦 皆川洪園	池大雅 與謝燕村 祇園南海 柳里恭	山本梅逸 田能村竹田 中村竹洞	柴田是眞 鈴木百年 久保田米僊 川端玉章 今尾景年	結城素明 平福百穂 川端龍子 田中賴璋 木島櫻谷	野村文舉 幸野梅嶺 荒木寬畝	竹内栖鳳 山本春舉 橋本關雪



古歌謠新記

五十嵐力記

—「神武天皇の御東征」参考—

一、宇陀の高城に、嶋の係蹄張った。

待つた嶋ア、かからないで、どえらい鯨ア、かかつた。

もしも前妻が、おみやげと云つたら、そばの木の様だ、肉のないやつを、

扱いて、へいでやりませう。

もしも後妻が、御肴と云つたら、榊の実の様だ、ふたんなやつを、

どっさりへいでやりませう。

二、忍坂の坂の 大岩穴に、敵が群れを成してゐる、たとひ敵軍がいか程

をろと、勇氣に満ちた 久米の子が、頭椎石槌 大だんびらの、劍を揮

つて 藪手ち派ぼぞぞ。

久米の子らが 頭椎石槌 大だんびらの 劍をふるつて 藪手つのは今ぞ。

三、勇氣にみちた 久米の子らが、粟の畑に生えた葦草、草の根もとを 根こぎに

捨てる、この様に敵軍を 藪手たすにおかうか、藪手つてやまう。(長谷川記)

四、勇氣にみちた 久米の子らが、垣のほとりに植えた薑、薑食へば 口ひびらぐ、

その如く敗軍の、恨みは決して 忘れまいぞ、藪手たすにおかうか、藪手つてやまう。

五、神風のゆたに吹く伊勢、伊勢の海の 大石にはひまつはる 細螺のやう

に、すき間もなく 敵軍をかこみ、藪手たすにおかうか、藪手つてやまう。(長谷川記)

六、楯をならべて 伊那佐の山の、木の間がくれに 敵情を、目守り窺ひ

戦ひて、ああく 飢えた 辨当持つ、鶺鴒の仲間よ はやう

来て、吾等の飢を 救へ救へ。

—「神武天皇の御東征」参考—

一、宇陀の高城に、嶋の係蹄張った。
 待つてた嶋ア、がからないで、どえらい鯨ア、かかつた。
 もしも前妻が、おみやげと云つたら、そばの木の様な、肉のないやつを、
 扱いて、へいでやりませう。
 もしも後妻が、御肴と云つたら、榊の実の様な、ふたんなやつを、
 どっさりへいでやりませう。

二、忍坂の坂の 大岩穴に、敵が群れを成してゐる、たとひ敵軍がいか程
 をと、勇氣に満ちた 久米の子が、頭椎石槌 大だんびらの、劍を揮
 つて 撃ちち滅ぼそぞ。
 久米の子らが 頭椎石槌 大だんびらの 劍をふるつて 撃つのは今ぞ。

三、勇氣にみちた 久米の子らが、粟の畑に生えた葦草、草の根もとを 根こぎに
 捨てる、その様に敵軍を 撃ちたすにおかうか、撃つてやまう。(長谷川詠)

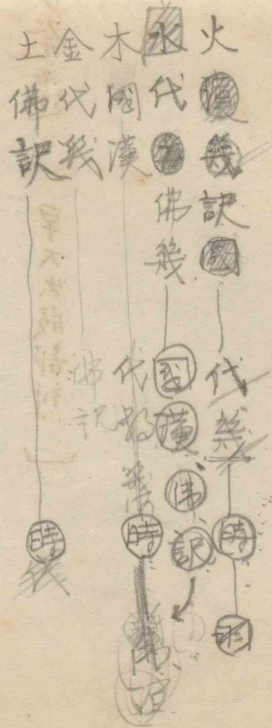
四、勇氣にみちた 久米の子らが、垣のほとりに植えた薑、薑食べば 口ひびらぐ、
 その如く敗軍の、恨みは決して 忘れまいぞ、撃ちたすにおかうか、撃つてやまう。

五、神風の ゆたに吹く伊勢、伊弉力の海の 大石にはひまつはる 細螺のやう
 に、すき間もなく 敵軍をかこみ、撃ちたすにおかうか、撃つてやまう。
 (長谷川詠)

六、楯をならべて 伊那佐の山の、木の間がくれに 敵情を、目守り窺ひ
 戦ひて、ああく 飢えた 辨當持つ、鶺鴒の仲間よ はやう
 来て、吾等の 飢を 救へ救へ。

〔五十嵐力詠 國歌の胎生及び発達 早大出版部刊〕

〔五十片古本書院圖書の明主書〕



東ア、五部書院の購書、殊へ殊へ。

澤山ア、あるく、時を以て、

六、新書、

三、

五、

その時、

四、

計、

三、

入書の千、

二、

一、

外、

中、

十、

10時20分
 1時20分
 2時00分
 2時30分

本
 本
 法
 何

(是式也)

〔五十原の古書〕 國傳の胡書

代漢 佛幾
木代 佛幾
金代 佛幾
土代 佛幾

10時 20分
1時 20分
2時 00分
2時 30分

一、 五十原の古書 國傳の胡書

二、 五十原の古書 國傳の胡書

三、 五十原の古書 國傳の胡書

四、 五十原の古書 國傳の胡書

五、 五十原の古書 國傳の胡書

六、 五十原の古書 國傳の胡書

七、 五十原の古書 國傳の胡書

八、 五十原の古書 國傳の胡書

九、 五十原の古書 國傳の胡書

十、 五十原の古書 國傳の胡書

十一、 五十原の古書 國傳の胡書

十二、 五十原の古書 國傳の胡書

十三、 五十原の古書 國傳の胡書

十四、 五十原の古書 國傳の胡書

十五、 五十原の古書 國傳の胡書

十六、 五十原の古書 國傳の胡書

十七、 五十原の古書 國傳の胡書

十八、 五十原の古書 國傳の胡書

十九、 五十原の古書 國傳の胡書

二十、 五十原の古書 國傳の胡書

二十一、 五十原の古書 國傳の胡書

二十二、 五十原の古書 國傳の胡書

二十三、 五十原の古書 國傳の胡書

二十四、 五十原の古書 國傳の胡書

二十五、 五十原の古書 國傳の胡書

二十六、 五十原の古書 國傳の胡書

二十七、 五十原の古書 國傳の胡書

二十八、 五十原の古書 國傳の胡書

二十九、 五十原の古書 國傳の胡書

三十、 五十原の古書 國傳の胡書

古書

五十原の古書